

岐阜県文化財保護センター

調査報告書 第155集

隨縁寺裏B地点遺跡II

2022

岐阜県文化財保護センター

隨縁寺裏 B 地点遺跡 II

2022

岐阜県文化財保護センター

序

岐阜県北部の飛騨地域は、豊かな山林と山あいを流れる数々の清流によって育まれた美しい自然のなかにあります。飛騨地域は岐阜県の中でも北陸や中部高地との関わりが深く、古くから各地との交流を盛んにもちつつ豊かな文化を育み続けてきました。遺跡の所在する高山盆地北西部は、牧ヶ洞断層などの影響で南西から北東方向に直線的に伸びる丘陵が特徴的であり、眼下に川上川が流れ、市街から続く宮川との合流点も望むことができます。

このたび、国土交通省中部地方整備局高山国道事務所による中部縦貫自動車道高山清見道路事業に伴い、高山市上切町にある隨縁寺裏B地点遺跡の発掘調査を実施しました。今回の調査では、掘立柱建物2棟などを確認することができ、中世に建てられたことが分かりました。また、自然流路からは、古墳時代前期から古代にかけての土師器や須恵器、灰釉陶器などの数多くの遺物を確認することができ、地域の歴史を考える上で貴重な資料を得ることができたと考えています。本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成に当たりまして、御支援・御協力をいただきました関係諸機関並びに関係者各位、高山市教育委員会、地元地区的皆様に深く感謝申し上げます。

令和4年3月

岐阜県文化財保護センター

所長 岡田 知也

例　　言

- 1 本書は、岐阜県高山市上切町に所在する隨縁寺裏B地点遺跡（岐阜県遺跡番号 21203-11313）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、中部縦貫自動車道高山清見道路事業に伴うもので、国土交通省中部地方整備局から岐阜県が委託を受けた。発掘作業及び整理等作業は、岐阜県文化財保護センターが実施した。
- 3 発掘作業は平成27年度、整理等作業は令和2年度に実施した。
- 4 発掘作業及び整理等作業の担当は、本書第1章第2節に一括して掲載した。
- 5 本書の執筆は、第1章、第2章、第3章第1・2節は柳坪武志が行った。第3章第3節は三島誠・小林新平の所見をもとに中野真吾が行った。第4章は中野が行った。また、編集は柳坪・中野が行った。
- 6 発掘作業における現場管理、掘削、測量、景観写真撮影、出土遺物の洗浄・注記などの支援業務は、株式会社イビソクに委託して行った。整理等作業における作業管理、出土遺物の整理作業、挿図・写真図版作成などの支援業務は、橋本技術株式会社岐阜営業所に委託して行った。
- 7 遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。
- 8 発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である（敬称略・五十音順）。
- 岩田修、岩田崇、近藤大典、田中彰、三好清超、渡邊博人、高山市教育委員会
- 本文中の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標系第VII系を使用する。
- 土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄 2014『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。
- 調査記録及び出土遺物は、岐阜県文化財保護センターで保管している。

目 次

序

例言

第1章 調査の経緯

　第1節 調査に至る経緯.....1

　第2節 調査の方法と経過.....2

第2章 遺跡の環境

　第1節 地理的環境.....5

　第2節 歴史的環境.....6

第3章 調査の成果

　第1節 遺跡の基本層序.....10

　第2節 遺構・遺物の概要.....12

　第3節 遺構・遺物.....16

　発掘区図面割り図、発掘区全城図分割図、遺構一覧表、遺物観察表

第4章 総括

　第1節 掘立柱建物について.....51

　第2節 土地利用の変遷.....54

引用・参考文献.....59

写真図版

報告書抄録

挿図目次

図 1 遺跡位置図	1	図 19 NR017 出土遺物（1）	27
図 2 試掘・確認調査坑、本発掘調査範囲位置図	2	図 20 NR017 出土遺物（2）	28
図 3 発掘区地区割り図	2	図 21 NR032 出土遺物（1）	29
図 4 随縁寺裏B地点遺跡周辺の地形と地質	5	図 22 NR032 出土遺物（2）	30
図 5 周辺遺跡位置図	8	図 23 遺構外出土遺物（1）	32
図 6 基本層序の位置	10	図 24 遺構外出土遺物（2）	33
図 7 基本層序	11	図 25 遺構外出土遺物（3）	34
図 8 主要遺構配置図	13	図 26 発掘区面割り図	35
図 9 SB 1 遺構図（1）	17	図 27 発掘区全域図分割図（1）	36
図 10 SB 1 遺構図（2）	18	図 28 発掘区全域図分割図（2）	37
図 11 SB 1 遺構図（3）	19	図 29 発掘区全域図分割図（3）	38
図 12 SB 2 遺構図（1）	20	図 30 発掘区全域図分割図（4）	39
図 13 SB 2 遺構図（2）	21	図 31 発掘区全域図分割図（5）	40
図 14 SA 1 遺構図	22	図 32 発掘区全域図分割図（6）	41
図 15 SA 2 遺構図	22	図 33 SB 1・SB 2、SH 1～SH 7 の配置	52
図 16 SK・SD 遺構図	23	図 34 ZB II 発掘区と白山神社の位置	53
図 17 SD・NR 遺構図	25	図 35 遺跡の立地	54
図 18 SP・SK・SD 出土遺物	26	図 36 随縁寺裏B地点遺跡主要遺構配置図	56

表目次

表 1 TP 1 出土遺物	2	表 13 土坑一覧表（1）	43
表 2 周辺の遺跡一覧	9	表 14 土坑一覧表（2）	44
表 3 検出遺構一覧表	12	表 15 溝一覧表	44
表 4 出土遺物一覧表	14	表 16 自然流路一覧表	44
表 5 石器類器種別数量表	15	表 17 土器類観察表（1）	45
表 6 挖立柱建物一覧表	42	表 18 土器類観察表（2）	46
表 7 挖立柱建物付属遺構一覧表（SB 1）	42	表 19 土器類観察表（3）	47
表 8 挖立柱建物付属遺構一覧表（SB 2）	42	表 20 土器類観察表（4）	48
表 9 柱穴列一覧表	42	表 21 土器類観察表（5）	49
表 10 柱穴列付属遺構一覧表（SA 1）	42	表 22 石器類観察表	50
表 11 柱穴列付属遺構一覧表（SA 2）	43	表 23 SB 1・SB 2、SH 1～SH 7 の比較	53
表 12 単独柱穴一覧表	43		

挿入写真目次

写真 1 調査前状況（北東から）	4	写真 3 遺物包含層掘削状況	4
写真 2 重機による表土掘削状況	4	写真 4 遺構掘削状況	4

写真図版目次

図版 1 発掘区遠景	図版 5 出土遺物 1
図版 2 発掘区全景	図版 6 出土遺物 2
図版 3 挖立柱建物	図版 7 出土遺物 3
図版 4 挖立柱建物、溝、自然流路	図版 8 出土遺物 4

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

隨縁寺裏B地点遺跡は、岐阜県北部、飛騨地域の中心都市である高山市に所在し、市街地が広がる高山盆地の北西端に位置する（図1）。

今回の発掘調査は、国土交通省中部地方整備局高山国道事務所（以下、「高山国道事務所」という。）による中部縦貫自動車道高山清見道路事業に伴い実施したものである。この道路は、高山市と東海北陸自動車道を結び、高速交通サービスの提供、高山市内の交通混雑の緩和、さらには沿線の文化・観光資源を活かした地場産業振興や観光リゾートとしての地域発展の支援等を目的に計画された一般国道の自動車専用道路である。

事業予定地内に周知の埋蔵文化財包蔵地「隨縁寺裏B地点遺跡」（岐阜県遺跡番号 21203-11313）が所在することから、事業に先立ち岐阜県教育委員会（以下、「県教育委員会」という。）が平成26年12月3日、平成27年3月23日・24日に試掘・確認調査を実施した。調査の結果、TP1では土師器・須恵器を含む土坑・自然流路が確認された。

その後、文化財保護法第94条第1項の規定に基づき、高山国道事務所長から県教育委員会教育長（以下、「県教育長」という。）あて埋蔵文化財発掘通知（平成27年4月9日付け国部整高調第3号）が

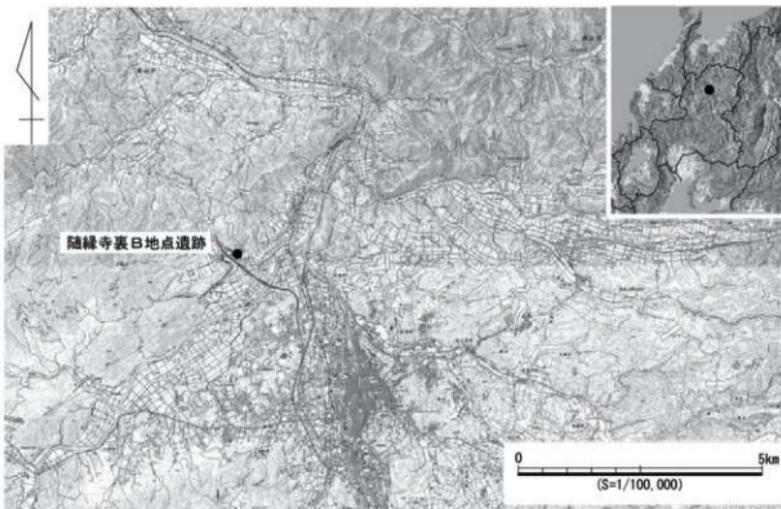


図1 遺跡位置図

（国土地理院発行2万5千分の1地形図 平成23年「高山」、平成29年「町方」、平成30年「飛騨古川」、令和元年「三日町」）を使用

2 第1章 調査の経過

表1 TP1出土遺物

試掘坑 No.	検出遺構数（基数）	出土遺物（点数）						合計	
		縄文土器	弥生土器	土師器	須恵器	灰釉陶器	陶磁器		
TP1	自然流路（1）土坑（1）	0	0	5	8	1	0	2	16

提出され、同条第4項の規定に基づき、県教育長から高山国道事務所長あてに発掘調査実施の勧告（平成27年4月9日付け社文第54号の17）が通知された。高山国道事務所長は、発掘調査の実施を県教育長に依頼し、岐阜県文化財保護センター（以下、「センター」という。）が実施した。センターは調査着手後、発掘調査の報告（平成27年5月27日付け文財セ第80号）を県教育長に提出した。

第2節 調査の方法と経過

1 調査の方法

発掘調査は平成27年度に850m²を対象に実施した。発掘区は平成25年度に発掘調査を行った隨縁寺裏B地点遺跡の大グリッドに合わせ、世界測地系第VII系平面直角座標（X=18,700, Y=5,800）を原点として100m×100m四方の大グリッドを設定した。さらに、大グリッド内に5m×5mの小グリッド（以下、「グリッド」という。）を設定した。北から南へAからI、西から東へ1から8を設定した（図3）。発掘区の西北隅はC1グリッド、南西隅はI2グリッド、南東隅はG8グリッド、北東隅はB7グリッドとなる。

表土掘削 表土掘削はバックホウ

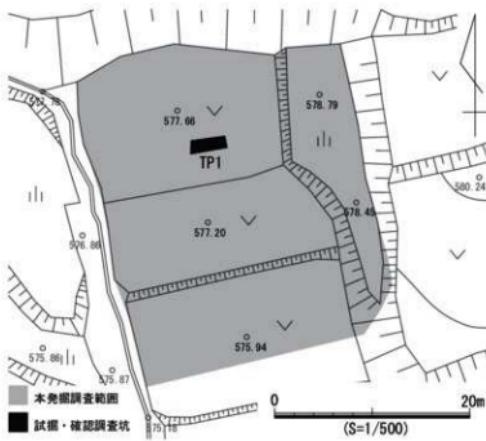


図2 試掘・確認調査坑、本発掘調査範囲位置図

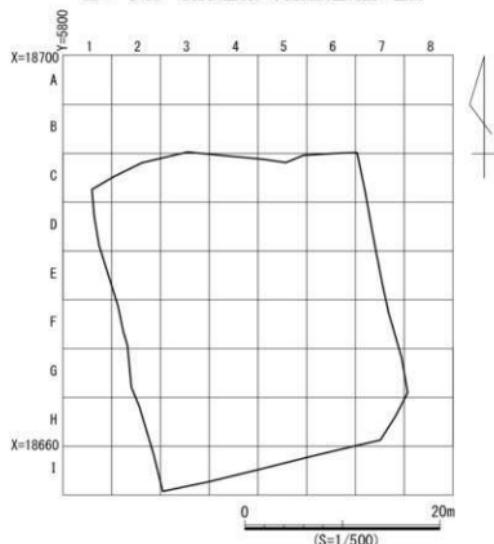


図3 発掘区地区割り図

による重機掘削で行った。

遺物包含層掘削・遺構検出・遺構掘削 遺物包含層掘削・遺構検出・遺構掘削はジョレン・移植ゴテなどを用いて人力で行った。遺構掘削では、土層断面等の記録を作成しつつ、遺構埋土をすべて取り除いた。また、必要に応じて遺構断ち割り調査を実施した。遺構番号は検出順の通番とし、S001番から番号を与えた。整理等作業時には、今後の資料活用時に支障を来さぬよう、この番号の先頭のSを取り、替わりに遺構の略号を付与した（第3章第2節参照）。本書の「遺構一覧表」にも「遺構名」として記載した。

遺構実測 個別の遺構実測図の作成は、三次元測量・図化システムによって行ったが、遺構断面図は手測りで実測した。図面の縮尺は20分の1を基本としつつ、実測対象に応じて適切な縮尺を選択した。

写真撮影 写真撮影は、一眼レフ35mmカメラ（リバーサルフィルム、モノクロフィルム）、中判カメラ（リバーサルフィルム、モノクロフィルム）、デジタルカメラで撮影した。遺跡全景写真は、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。

遺物取り上げ 出土遺物は、基本的にトータルステーションによる三次元座標の測定を行って取り上げた。

2 発掘作業の経過

第1週（6/24～6/26）24日に北から表土掘削を開始した。

第2週（6/29～7/3）29日に表土掘削を完了した。同日、グリッド杭の打設を開始した。30日から作業員作業を開始し、遺物包含層掘削、遺構検出、遺構掘削を開始した。

第3週（7/6～7/10）6日に発掘区中央を南北に走る自然流路（NR032）を検出し、掘削を開始した。

第4週（7/13～7/17）14日に掘立柱建物（SB1）、柱穴列（SA1・SA2）を検出し、掘削を開始した。

第5週（7/20～7/24）24日に掘立柱建物（SB2）を検出し、掘削を開始した。

第6週（7/27～7/31）27日にタイムスリップ探検隊飛騨を開催した。岐阜県内に住む小学校5・6年生の親子8組（20名）が参加した。30日に飛騨市教育委員会の三好清超氏が来訪した。31日に自然流路（NR032）の掘削が完了した。

第7週（8/3～8/7）4日に空撮前清掃を実施し、5日に景観撮影を実施した。

第8週（8/10～8/14）夏季休業。

第9週（8/17～8/21）18日より埋め戻しを開始し、20日に完了した。

第10週（8/24～8/28）27日に事業者である高山国道事務所に現地を引渡した。

出土遺物の洗浄・注記等の一次整理作業は、9月16日から1月15日までの期間にセンター飛騨国府事務所で行った。

3 整理等作業の経過

整理等作業はセンター飛騨駐在事務所において令和2年10月から令和3年3月まで実施した。令和2年11月16日に渡邊博人氏（元各務ヶ原市教育委員会）に須恵器に関する指導を、令和2年12月

4 第1章 調査の経過

8日に田中彰氏（高山市史編纂委員）に遺跡周辺の土地利用の変遷について指導を受けた。

4 調査体制

発掘作業及び整理等作業の体制は、以下のとおりである。

センター所長	宮田敏光（平成27年度）、森勝利（令和2年度）
総務課長	二宮隆（平成27年度）、布施美千代（令和2年度）
調査課長	成瀬正勝（平成27年度）、春日井恒（令和2年度）
調査担当係長	大宮次郎（平成27年度）、春日井恒（令和2年度兼務）
調査担当主査	三島誠（令和2年度）
担当調査員	三島誠・小林新平（平成27年度）、柳坪武志（令和2年度）



写真1 調査前状況（北東から）



写真2 重機による表土掘削状況



写真3 遺物包含層掘削状況



写真4 遺構掘削状況

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

高山市市街地の北西部には見量山（997m）や三枝山（825m）の山々が連なる。この2つの山の間に高草洞が北西から南東方向へ走り、寿美峠までの直線的な奥行きの深い谷になっている。この谷を流れる高曾洞川が両岸に狭い氾濫原を形成する。見量山や三枝山の南西側の麓には、国府断層帯の一つである牧ヶ洞断層が北東から南西方向へ直線的に延びる。見量山や三枝山は断層の影響と考えられる凹地や高まり、尾根の屈曲など特徴的な地形が認められる。また、三枝山の南西側は、断層と直交する直線的な谷が走り、細長い半島状の丘陵を形成している。隨縁寺裏B地点遺跡は、この細長い半島状の丘陵端部、谷の入口部分の高曾洞川左岸の緩傾斜地に位置する（図4）。

当遺跡の南側の丘陵下には、崖錐性堆積物による斜面地が形成される。さらに南側は断層と平行して川上川が流れ、川筋を変えながら砂礫を堆積させ、河岸段丘（砂礫台地）を形成する。

地質学的には、当遺跡西側の見量山系の基盤は、濃飛流紋岩で形成される。一方、三枝山の基盤は、上広瀬層や森部層のように礫岩・砂岩・凝灰岩・石灰岩・粘板岩・安山岩等で構成され、飛騨外縁帯の一部を形成している。当遺跡内で見られる自然堆積物の多くは、三枝山の基盤層に由来する褐色系の砂質シルトであり、地形の傾斜に沿って堆積し、緩斜面地に厚く堆積する。また、崖錐・崩積性堆積物の下などに、河川由来とみられる粘質土や微細砂をラミナ状に含む細砂及び粘土層、1mを超える疊を含む土石流堆積物が認められることから、崩落と氾濫を繰り返しながら斜面地を形成したと推定される。

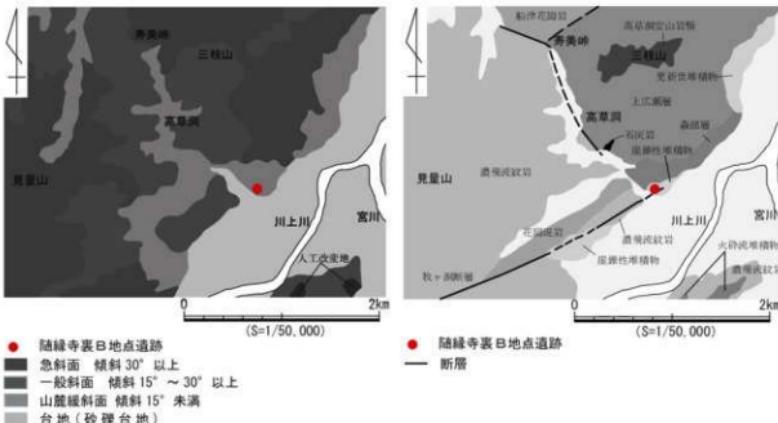


図4 隨縁寺裏B地点遺跡周辺の地形と地質

地質図(左)は地質調査所『5万分の1地質図(1975「飛騨古川」・1982「三日町」)』を基に作成、地形分類図(右)は『岐阜県「5万分の1土地分類基本調査(地形分類図)(2005「白木峰・古川」・2000「三日町」)』を基に作成した。

第2節 歴史的環境

当遺跡周辺には、川上川左岸の山麓を中心に遺跡が分布する（図5）。当遺跡周辺では数多くの発掘調査が実施されているため、本節では発掘調査報告書が刊行された遺跡を中心に記載する。文中の遺跡名に続く括弧内の番号は、図5・表2と一致する。

縄文時代の遺跡は、川上川と宮川両岸の丘陵地や河岸段丘上に集中する。日焼遺跡（61）では、平成27・28年度にセンターが発掘調査を実施し、早期の煙道付炉穴2基、中期の竪穴建物2軒などを検出した。中切上野遺跡（73）では、平成8年度に高山市教育委員会（以下、「市教委」という。）により発掘調査が実施され¹⁾、早期の集石遺構2基と前期の竪穴建物15軒などが検出された。また、同遺跡では平成29・30年度にセンターが発掘調査を実施し、前期と中期の竪穴建物58軒などを検出した。赤保木遺跡（30）では、平成3年度に市教委により発掘調査が実施され²⁾、竪穴建物4軒などが検出された。平成16年度にセンターが発掘調査を実施し、中期の竪穴建物26軒などを検出した。ウバガ平遺跡（47）では、平成13・19年度にセンターが発掘調査を実施し、前期から中期の竪穴建物2軒などを検出した。

弥生時代から古墳時代初頭の遺跡の多くは、縄文時代の遺跡と立地が類似するが、墓域は丘陵尾根部分に展開する。三枝城跡（49）では、平成18・20年度にセンターが発掘調査を実施し、土坑から前期の柴山出村系土器の壺が出土した。赤保木遺跡では、平成16年度にセンターが発掘調査を実施し、中期の竪穴建物2軒と古墳時代初頭の竪穴建物4軒を検出し、内垣内式の横羽状文甕や櫛描波状文を施す中部高地系の土器が出土した。ウバガ平遺跡では、中期の竪穴建物3軒を検出し、内垣内式の横羽状文甕や栗林式土器の壺、榎田タイプの石斧が出土した。中切上野遺跡では、内垣内式の横羽状文甕3個体分が合わせて土坑墓1基を検出した。野内遺跡（50）では、平成14年度から17年度にセンターが発掘調査を実施し、D地区では後期の竪穴建物1軒、B地区では後期後半から古墳時代初頭の竪穴建物3軒、C地区で2軒を検出した。上切寺尾古墳群（60）では、後期後半から古墳時代初頭の墳墓51基を検出した。現段階で後期後半の墳墓は飛騨地域最古の墳墓である。中切上野遺跡では、遺跡内に所在する中切上野5号古墳（71）を調査した他、古墳時代初頭の方形周溝墓1基を検出した。

古墳時代前期から後半の遺跡の分布は見墓山南東部の緩斜面と、川上川左岸と宮川との合流点付近に認められる。集落跡は野内遺跡とウバガ平遺跡で確認した。野内遺跡では、A地区で5世紀代の竪穴建物を54軒、B地区で古墳時代中期から終末期の竪穴建物9軒、D地区で後期の竪穴建物1軒を検出した。ウバガ平遺跡では、前半から後期後半の竪穴建物9軒を検出した。赤保木遺跡では、中期の竪穴建物1軒を検出した。古墳は、平成4年度に市教委により赤保木ぼた上1号古墳～7号古墳（52～58）の5号古墳（56）の範囲確認調査³⁾が行われ、埋葬施設が竪穴式石室であることが判明した。冬頭大塚古墳（94）では昭和45年度に市教委により発掘調査⁴⁾が行われ、5世紀後半の2段築成の円墳であることが判明した。冬頭山崎1号古墳（90）、冬頭山崎2号古墳（91）、冬頭山崎1号横穴（92）では、平成10年度にセンターが発掘調査を実施した。冬頭山崎2号古墳は5世紀末の2段築成の円墳、冬頭山崎1号古墳は横穴式石室を主体部とする7世紀前半の古墳、冬頭山崎1号横穴は高山盆地北東部以外で初めて発掘調査した横穴で、7世紀代のものであることが判明した。与島3号古墳

(41)、与島4号古墳(42)、与島6号古墳(44)では、平成9年度にセンターが発掘調査を実施し、横穴式石室を主体部とする7世紀中葉の円墳であることが判明した。

古墳時代終わり頃から平安時代にかけては、遺跡数の半分を古窯群が占め、見量山の西麓と寿美峠を越えた国府町瓜巣に集中する。今回調査を行った随縁寺裏B地点遺跡(1)では、平成25年度にもセンターが発掘調査を実施しており、7世紀後葉から8世紀前葉頃の堅穴建物7軒などを確認した。堅穴建物群の東側には、堅穴建物群と先後関係にある砂礫層が堆積した自然流路があり、その上面で建物跡を確認できることから、堅穴建物は谷を形成する自然流路が埋まり緩斜面になった後に、同じ場所に繰り返し建てられたことが判明した。日焼遺跡では、古墳時代終末期から奈良時代にかけて堅穴建物35軒、掘立柱建物3棟を検出した。また、仏堂と考えられる10世紀前半の掘立柱建物1棟や10世紀後半の礎石建物1棟を検出した。三枝城跡では、9世紀前半から10世紀前半の礎石建物を検出した。三枝城跡の南麓にある野内遺跡B地区では、堅穴建物45軒と掘立柱建物4棟、鍛冶関連遺構30基を検出した。また、野内遺跡C地区では、古代の水田を検出した。ウバガ平古墳群(45)では、7世紀末から8世紀初頭と考えられる終末期の円墳4基を検出した。飛騨国分寺跡(118)では、昭和61年度に市教委により範囲確認調査⁵⁾を実施され、軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、鬼瓦などが出土した。飛騨国分尼寺跡(101)では、昭和63年度に市教委により範囲確認調査⁶⁾が実施され、礎石建物が確認された。古窯跡では、市教委により昭和48年度に赤保木古窯跡群(27)内の赤保木1~6号古窯が発掘調査⁷⁾され、6基の窯が確認された。1~4号窯は瓦窯で、飛騨国分寺と飛騨国分尼寺に瓦を供給していたことが明らかとなった。赤保木8号古窯跡(20)では、平成13年度に市教委により発掘調査⁸⁾が実施され、窯体に伴う構造は確認されなかったが、10世紀初頭の灰釉陶器が出土した。平野1号古窯跡(17)では、平成15年度に市教委により発掘調査⁹⁾が実施され、8世紀前半の須恵器を生産した窯であることが判明した。

中世では、城館跡6箇所、社寺跡1箇所、集落跡1箇所がある。平野部を見下ろす尾根上に分布する。三枝城跡では、平成18・20年度にセンターが発掘調査を実施し、主郭西側に二重の堀切があり、寿美峠方面からの進入に対する監視・防御的な性格を持つことが判明した。冬頭城跡(93)では、平成10年度にセンターが発掘調査を実施し、尾根上に簡素な切岸や削平地などの防御施設を有する山城であることが判明した。野内遺跡D地区では、12世紀後半~13世紀前半の四面庇建物2軒を検出した。

注

- 1) 高山市教育委員会 1998『中切上野遺跡発掘調査報告書』
- 2) 高山市教育委員会 1993『前平山稜遺跡 赤保木遺跡発掘調査報告書』
- 3) 高山市教育委員会 1995「1 赤保木5号古墳』『高山市内道路発掘調査報告書』
- 4) 高山市教育委員会 1971『冬頭大塚古墳発掘調査報告書』
- 5) 高山市教育委員会 2001「4 飛騨国分寺跡』『高山市内遺跡発掘調査報告書』
- 6) 高山市教育委員会 1990『飛騨国分尼寺発掘調査報告書』
- 7) 高山市教育委員会 1975『飛騨国分寺瓦窯発掘調査報告書』
- 8) 高山市教育委員会 2005「4 赤保木8号古窯跡』『高山市内遺跡発掘調査報告書』
- 9) 高山市教育委員会 2005「10 平野遺跡・平野1号古窯跡』『高山市内遺跡発掘調査報告書』



図5 周辺遺跡位置図

(国土地理院発行 2万5千分の1地形図 「高山」、「町方」、「飛驒古川」、「三日町」を使用)

表2 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	諸侯寺裏B地点遺跡	散布地	圓文・古墳・古代・中世	61	日燒遺跡	集落跡・社寺跡	圓文・弥生・奈良・平安
2	瓜巣中島古窯跡	生産遺跡	白鳳	62	上切(桜木)遺跡	散布地	平安
3	瓜巣小坂古窯跡	生産遺跡	白鳳	63	竹ヶ瀬A堆山遺跡	散布地	古墳
4	わせ洞石灰窯跡	生産遺跡	近世	64	竹ヶ瀬B地点遺跡	散布地	圓文
5	瓜巣わせ洞古窯跡	生産遺跡	奈良	65	中切城跡	城郭跡	中世
6	上り洞遺跡	散布地	圓文	66	中切前平城跡	城郭跡	難倉・室町・安土桃山
7	瓜巣大洞1号古墳	古墳	古墳	67	中切上野1号古墳	古墳	古墳
8	瓜巣大洞1号古窯跡	生産遺跡	平安	68	中切上野2号古墳	古墳	古墳
9	瓜巣大洞2号古窯跡	生産遺跡	平安	69	中切上野3号古墳	古墳	古墳
10	後洞遺跡	散布地	圓文	70	中切上野4号古墳	古墳	古墳
11	よしま1号古窯跡	生産遺跡	平安	71	中切上野5号古墳	古墳	古墳
12	よしま2号古窯跡	生産遺跡	平安	72	中切上野6号古墳	古墳	古墳
13	よしま3号古窯跡	生産遺跡	平安	73	中切上野遺跡	集落跡	圓文・弥生・古墳・奈良・平安
14	与島A地点遺跡	散布地	圓文	74	中切遺跡	古墳	圓文・弥生・奈良
15	上切平野古墳群	古墳	古墳	75	大洞塙古墳	古墳	古墳
16	平野遺跡	散布地	圓文	76	中山古窯跡	生産遺跡	平安
17	平野1号古窯跡	生産遺跡	平安	77	櫻宮田遺跡	散布地	弥生・奈良
18	平野2号古窯跡	生産遺跡	平安	78	西ノ山遺跡	散布地	弥生・奈良
19	平野3号古窯跡	生産遺跡	平安	79	下切遺跡	散布地	圓文・弥生
20	赤保木8号古窯跡	生産遺跡	奈良	80	宮野B地点遺跡	散布地	圓文・弥生
21	赤保木9号古窯跡	生産遺跡	奈良	81	中切宮ヶ瀬遺跡	散布地	圓文・古墳
22	赤保木10号古窯跡	生産遺跡	奈良	82	中切王稼古墳	古墳	古墳
23	赤保木11号古窯跡	生産遺跡	奈良	83	中切日繞遺跡	散布地	圓文・奈良
24	赤保木12号古窯跡	生産遺跡	奈良	84	日燒(燒きき)古窯跡	生産遺跡	奈良
25	下やせ尾1号古墳	古墳	古墳	85	四十九院廢寺	社寺跡	弥生・白鳳
26	下やせ尾2号古墳	古墳	古墳	86	上ヶ見古墳	古墳	古墳
27	赤保木古窯跡群	生産遺跡	奈良	87	東田古墳	古墳	古墳
28	真言宗薬山古墳	古墳	古墳	88	冬須遺跡	散布地	圓文・弥生
29	赤保木7号古窯跡	生産遺跡	平安	89	流れ田古墳	古墳	古墳
30	赤保木遺跡	集落跡	圓文	90	冬須山崎1号古墳	古墳	古墳
31	ミヨガ平1号古墳	古墳	古墳	91	冬須山崎2号古墳	古墳	古墳
32	ミヨガ平2号古墳	古墳	古墳	92	冬須山崎1号模穴	穀穴墓	古墳
33	赤保木本願寺遺跡	散布地	圓文	93	冬須城跡	城郭跡	古墳
34	川上川左岸1号古墳	古墳	古墳	94	冬須城跡	城郭跡	室町
35	下之切遺跡	散布地	圓文	95	下岡本古墳	古墳	古墳
36	山田城跡	城郭跡	室町	96	下岡本遺跡	散布地	奈良・平安
37	底洞遺跡	散布地	圓文・弥生	97	冬須田遺跡	散布地	平安
38	打越遺跡	散布地	圓文・弥生	98	中山城跡	城郭跡	室町
39	与島1号古墳	古墳	古墳	99	下岡本神田遺跡	散布地	平安
40	与島2号古墳	古墳	古墳・近世	100	古船遺跡	散布地	平安
41	与島3号古墳	古墳	古墳	101	飛腳國分尼寺跡	社寺跡	奈良
42	与島4号古墳	古墳	古墳	102	恵喜磨寺跡	社寺跡	圓文・室町
43	与島5号古墳	古墳	古墳	103	の場遺跡	散布地	奈良
44	与島6号古墳	古墳	古墳	104	下切芦谷遺跡	散布地	古墳
45	ウバガ平古墳群	古墳	古墳	105	下切古墳	古墳	古墳
46	与島8号古墳	散布地	奈良	106	三川落合遺跡	散布地	圓文
47	ウバガ平遺跡	集落跡	圓文・弥生・古墳・平安	107	三川越中街遺跡	その他遺跡	近世
48	与島C地点遺跡	散布地	古代	108	松本上野遺跡	散布地	圓文
49	三枝城跡	城郭跡	弥生・古代・室町	109	茂島古墳	古墳	古墳
50	野内遺跡	集落跡	圓文・弥生・古墳・奈良・平安・中世	110	前平山棟遺跡	散布地	圓文・弥生
51	諸侯寺裏A地点遺跡	散布地	圓文	111	前平古墳	古墳	古墳
52	赤保木ばた上1号古墳	古墳	古墳	112	西ヶ瀬古墳	古墳	古墳
53	赤保木ばた上2号古墳	古墳	古墳	113	前平遺跡	散布地	圓文・弥生
54	赤保木ばた上3号古墳	古墳	古墳	114	上根遺跡	散布地	圓文
55	赤保木ばた上4号古墳	古墳	古墳	115	牧ヶ瀬古墳	古墳	古墳
56	赤保木ばた上5号古墳	古墳	古墳	116	馬場古墳	古墳	古墳
57	赤保木ばた上6号古墳	古墳	古墳	117	鍾中街道	その他の遺跡	近世
58	赤保木ばた上7号古墳	古墳	古墳	118	飛國國分寺跡	社寺跡	奈良
59	下林遺跡	散布地	弥生	119	桜ノ前遺跡	散布地	奈良
60	上切寺尾古墳群	その他の墓・古墳	弥生・古墳				

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の基本層序

発掘作業前の発掘区の土地利用状況は、畑地や水田であった。発掘区の地形は北西方向から南東方向に緩やかに下がる傾斜地である。基本層序は、平成26年度に岐阜県教育委員会が実施した試掘・確認調査や発掘区壁面（図6）で確認した層序、各層から出土した遺物の時期を検討して設定した。図7に、各地点における層序と基本層序との対応を柱状図で示した。以下、基本層序Ⅰ層からⅢ層までの詳細及び遺構出面について説明する。

I層 表土

発掘区内の現代の表土とその下層の整地土を一括してⅠ層とした。図7①のⅠa層は表土層である黒色のしまりや粘性がない畑耕作土で、層厚は0.22mである。図7②～④のⅠa層も表土層であり灰黄褐色のしまりや粘性がない腐植土で、層厚は0.10m～0.18mである。直径0.5cm～2cmの亜角礫を含む。図7①のⅠb層は暗褐色のしまりがあり粘性がややある整地土で、層厚は0.06mである。直径1cm～5cmの亜角礫を含む。図7②～④のⅠb層は現代の造成土・整地土層であり褐色のしまりや粘性がややある土で、層厚は0.15m～0.30mである。直径1cm～2cmの亜角礫を含む。発掘区全域で確認されたものの、発掘区東側にかけて層厚が薄くなっている。

II層 遺物包含層

黒褐色又は、暗褐色を呈する縄文時代から近世にかけての遺物包含層をⅡ層とした。層厚は0.04m～0.08mで、図7①周辺で確認した。

III層 基盤層

今回検出した遺構の基盤となつている堆積をⅢ層とした。明黄褐色のしまりや粘性がない砂礫土である。直径0.5cm～10cmの亜角礫を含む。

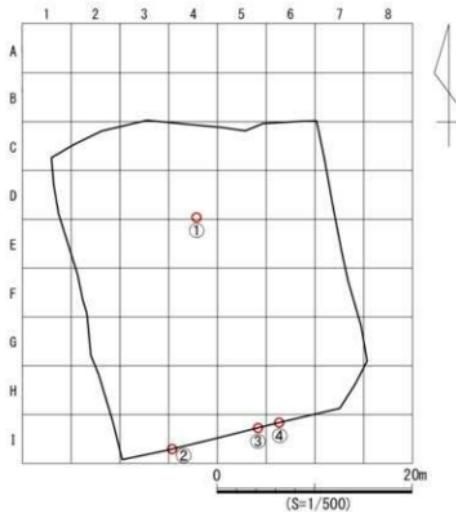
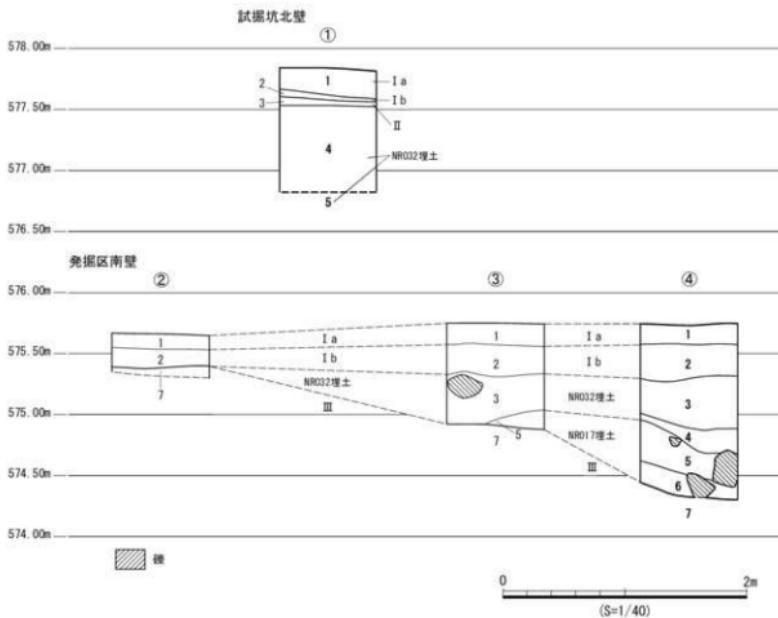


図6 基本層序の位置



試掘坑南壁

- 1 10W1.7/1 黒褐色土 しまりなし 粘性なし 程0.5~2cmの亜角礫を10%含む (Ia層)
- 2 10W3/4 緑褐色土 しまりあり 粘性ややあり 程1~5cmの亜角礫を含む (Ib層)
- 3 10W3/4 緑褐色土 しまりややあり 粘性ややあり (II層)
- 4 10W2/2 黒褐色土 しまりあり 粘性ややあり 程1~3cmの亜角礫を20%含む (NR032 塗土)
- 5 10W5/6 黄褐色砂礫土 しまりあり 粘性ややあり 程10~50cmの亜角礫を10%含む (NR032 塗土)

発掘区南壁

- 1 10W4/2 灰黃褐色土 しまりなし 粘性なし 程0.5~2cmの亜角礫を10%含む (Ia層)
- 2 10W4/2 灰褐色土 しまりあり 粘性ややあり 程1~3cmの亜角礫を10%含む (Ib層)
- 3 10W3/1 黑褐色土 しまりあり 粘性あり (程0.5~1cmの亜角礫を20%含む) (NR032 塗土)
- 4 7.5W3/1 黑褐色土 しまりなし 粘性なし (程0.5~1cmの亜角礫を30%含む) (NR032 塗土)
- 5 10W3/2 黄褐色砂礫土 しまりややあり 粘性ややあり 程5~20cmの亜角礫を50%含む 塗化鉛を5%含む (NR017 塗土)
- 6 10W4/1 明灰色砂礫土 しまりなし 粘性なし 程1~3cmの亜角礫を50%含む (NR017 塗土)
- 7 10W6/6 明黄色砂礫土 しまりなし 粘性なし 程5~10cmの亜角礫を10%含む (II層)

図7 基本層序

第2節 遺構・遺物の概要

1 遺構概要

(1) 概要

当遺跡で検出した遺構の数は表3のとおりである。遺構の時期決定は、出土遺物や遺構の重複関係から判断した。また、出土遺物が複数の時期にまたがる場合は原則として新しい時期を選択した。

本報告書において詳細について掲載した遺構の配置は図8のとおりである。なお、各遺構の説明文の「遺物出土状況」に記載した出土点数は、接合後破片数を示す。

(2) 遺構の分類

今回検出した遺構は、以下の要件に基づき分類した。

掘立柱建物 向かい合う2辺以上が確認できる、規則的に並んだ柱穴によって構成される建物。

柱穴列 柱穴と考えられる遺構が、3基以上規則的に配置されるもの。削平等により、対応する柱穴の並びが確認できない掘立柱建物の可能性があるものを含む。

単独柱穴 柱根や、柱痕跡、柱抜き取り痕、柱当たりが確認できる掘り込みのうち、他の遺構の付属施設でないもの。

溝 長細い平面形をもつ遺構で上端の短軸に対して長軸が5倍以上あるもののうち、他の遺構の付属遺構でないもの。

土坑 上記の遺構以外で掘り込みを伴うもの。

自然流路 流水等により自然に開削された谷状の流路。

(3) 遺構の略号

遺構の略号は、以下のとおりである。

掘立柱建物—SB、柱穴列—SA、単独柱穴—SP、土坑—SK、溝—SD、自然流路—NR

なお、掘立柱建物と柱穴列に付属する柱穴及び単独柱穴は、「SP020」のように発掘時の遺構番号の先頭にSPを付与した。同様に、土坑は「SK002」、溝は「SD013」、自然流路は「NR017」のように、発掘時の遺構番号の先頭にSK、SD、NRを付与した。

表3 検出遺構一覧表

遺構種別	掘立柱建物	柱穴列	単独柱穴	土坑	溝	自然流路	合計
合計	2	2	4	99	4	2	113

(4) 遺構一覧表

各遺構の位置や規模などの基礎的情報は、それぞれ種別ごとに作成した遺構一覧表に示した。遺構種別により一覧表の項目は異なるが、共通する項目の内容は次のとおりである。

堆積状況 以下のとおり、堆積状況をa～dと表記した。

a 単層 b 1 水平堆積 b 2 中央がU字状に窪む堆積が認められるもの

b 3 堆積の窪みが一方の掘方壁面に偏るもの b 4 複数遺構の切り合いの可能性があるもの

c 柱痕跡あり d 不明

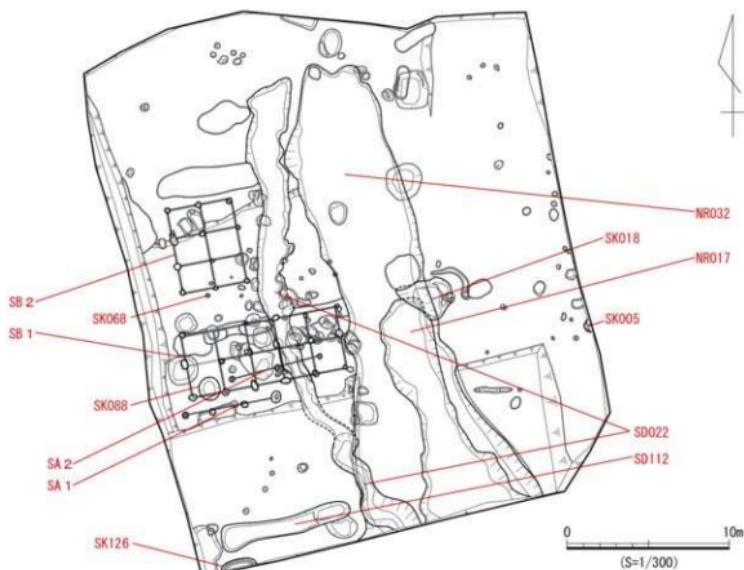


図8 主要遺構配置図

断面形状 以下のとおり、壁面形状をアラビア数字1～5で、底面形状をa～dで表記した。

1—壁が開く、2—壁が直立に近い、3—壁面に段がある、4—袋状に広がる、5—不明
a—丸いが平らのまま、b—底が2段になる、c—底面が凸凹、d—不明

平面・底面形状 以下のとおり、形状をアラビア数字1～6で表記し、円形と方形は、長軸と短軸の長さの比から、楕円形と長方形に細分した。

1—円形（1：1.2未満）、2—楕円形（1：1.2以上）、3—方形（1：1.2未満）、
4—長方形（1：1.2以上）、5—不定形、6—不明

規模 上端及び下端での長軸長と短軸長、深さを表記し、（　）は残存長を示す。

出土遺物 以下のとおり記号化して表記した。

J：縄文土器 H：弥生土器・土師器 P：須恵器 K：灰釉陶器 T：陶磁器

S：石器類 I：金属製品

2 遺物概要

(1) 概要

当遺跡で出土した遺物の総点数は表4のとおりである。出土遺物を大きく分類すると、土器類（1,637点、約97.5%）、石器類（41点、約2.4%）、金属製品（1点、約0.1%）となる。土器類が大半であり、土器類全体に占める時期別点数の割合は、縄文時代約1.7%、弥生時代～古代約96.7%、中世約1.5%、近世約0.1%である。掲載遺物点数は130点であり、その選択においては、遺構出土遺物のうち遺跡の性格や時期等を検討する上で必要なものや、遺構外出土遺物のうち遺跡の性格や消長を示

表4 出土遺物一覧表

種別	SB 1	SB 2	SA 1	SA 2	SK005	SK018	SK068	SK126	SD022	SD112	NR017	NR032	その他 遺構等	I層・ II層	総数		
土器類	縄文土器	0	0	0	0	0	0	0	1	0	8	2	0	17	28		
	弥生土器・ 土器類	0	0	0	0	7	14	0	0	0	15	0	274	384	17	257	968
	須恵器	0	0	0	0	0	3	0	0	0	1	191	110	9	161	475	
	灰釉陶器	0	0	1	0	4	0	0	0	0	0	36	18	8	71	140	
	中世陶器	0	0	0	0	0	1	0	0	1	2	0	0	3	15	22	
	中国産磁器	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	3	
	近世陶器	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	
小計		0	0	1	0	11	19	1	1	0	17	2	511	514	37	522	1,637
石器類		0	0	0	0	0	2	0	0	1	0	0	6	2	4	25	41
金属製品		0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	
総数		0	0	1	0	11	21	1	1	1	17	4	517	517	41	547	1,679

土器類の破片数は、接合後のものである。

すもの、分類別の代表的なものを中心とした。なお、遺物実測図の縮尺は3分の1としたが、一部の遺物についてはその大きさに応じて縮尺を替えた。

(2) 遺物の分類

遺物の器種や時期の判断については、以下の文献を参考にしたほか¹⁾。縄文土器は岩田崇氏、墨書き土器は近藤大典氏、須恵器・灰釉陶器は渡邊博人氏から指導・助言をいただいた。ただし、本報告書における掲載内容の責任は、執筆者にある。

①土器類

縄文土器

器種は深鉢であり、縄文時代早期前半・中期・後期に属す。

弥生土器

器種は甕であり、弥生時代中期・終末期に属す。

土師器

出土遺物の中で最も破片数が多い。器種は碗、高杯、甕、壺、瓶などがある。時期が判別できたものは古墳時代前期、古代に属す。

須恵器

蓋坏類、高杯、甕、壺瓶類、甕などがある。時期が判別できたものは古墳時代後期から奈良時代後半の時期に属す。产地は美濃須衛窯産が多くを占め、他に猿投窯産、在地産と考えられるものがある。

灰釉陶器

碗、皿、壺などがある。時期が判別できたものは平安時代後期に属す。在地産が多い。

中近世陶磁器

古瀬戸、中国産磁器、近世陶器がある。古瀬戸は浅碗、鉢皿、擂鉢型小鉢、端反碗があり、室町時代に属す。中国産磁器は碗があり、いずれも龍泉窯系である。近世陶器は練鉢である。

②石器類

今回の調査では41点が出土し、西田遺跡発掘調査報告書(財團法人岐阜県文化財保護センター1997)

の分類に基づき、表5のとおり分類した。出土点数は磨石・敲石類、剥片類が11点で最も多い。

③金属製品

1点の小片で、器種は不明である。

(3) 遺物観察表

遺物観察表は、それぞれ種別ごとに作成した。遺物の種別により観察表の項目は異なるが、共通する項目の内容は次のとおりである。

掲載番号 報告書に掲載した番号を表記した。

出土位置 遺物が出土したグリッド若しくは遺構を表記した。

層位 遺構以外のI層・II層などから出土した場合は基本層序番号を、遺構から出土した場合は人工層位（5cm毎にa層・b層・c層・・・として取り上げ）若しくは分層した土層番号（1層・2層・3層・・・として取り上げ）をアルファベットや数字で表記した。なお、自然流路出土遺物で層位が明らかでないものは「-」と表記した。

大きさ 土器は口径・底径・器高、石器は長さ・幅・厚さの順に表記した。なお、土器の口径と底径の（ ）は復元長を、器高の（ ）は残存高を、石器の（ ）は残存長を示す。

注

1) 参考にした文献は以下のとおりである。

愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史』別編 室業2 中世・近世 濱系

愛知県史編さん委員会 2010『愛知県史』資料編 考古4 飛鳥～平安

愛知県史編さん委員会 2015『愛知県史』別編 室業1 古代 猿投系

赤塚次郎 2002『考古資料大観2 弥生・古墳時代 土器II』、小学校

赤塚次郎 2005『第1章第3節 時期区分』『愛知県史 資料編3 考古3 古墳』、愛知県

小林達雄 1994『繩文土器大観 1 草創期 早期 前期』、小学校

財団法人岐阜県文化財保護センター1997『西田遺跡』（岐阜県文化財保護センター調査報告書29集）

城ヶ谷和弘 2010『第1章第3節 編年及び編年表 土師器・須恵器・施釉陶器（縄輪・灰輪）』『愛知県史 資料編4 考古飛鳥～平安』、愛知県

太宰府市教育委員会 2000『太宰府市の文化財 第49集 太宰府条坊跡 XV-陶磁器分類編一』

高橋浩二 2000『古墳出現期における越中の土器様相－弥生時代後期から古墳時代前期前半土器の編年的位置付け』『庄内式土器研究』XXII、庄内式土器研究会

田中啄、佐原真 2003『日本考古学辞典』、株式会社三省堂

兵頭勲 2008『押型文土器』『総覽 繩文土器』、株式会社アム・プロモーション

渡邊博人 1984『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』、各務原市教育委員会

渡邊博人 1996『美濃の後期古墳出土須恵器の様相－蓋環の型式設定とその編年試案－』『美濃の考古学』創刊号、「美濃の考古学」刊行会

渡邊博人 2008『美濃須衛窯について』『2008年度愛知県大会研究発表資料集』、日本考古学協会 2008年度愛知県大会実行委員会

表5 石器類器種別数量表

器種	スクレイバー	模形石器	打製石斧	磨製石斧	石核	RF
点数	1	1	6	1	1	3
器種	MF	打欠石錐	磨石・ 敲石類	砥石	御物石器	剥片類
点数	2	1	11	2	1	11

第3節 遺構・遺物

1 堀立柱建物

SB 1 (図9~11)

検出状況 F 2 ~ G 4 グリッド、III層上面で検出した。北側の柱穴列 (SP051、SP077、SP109、SP135、SP143) は南側より強く後世の造成による削平を受ける。SK140・SD022と重複し、本遺構が古い。

規模・形状 衍行5間 (9.94m、柱間 1.78m~2.30m)、梁行2間 (4.26m、柱間 2.08m~2.18m)、床面積 42.3 m² の総柱建物と考える。長軸方位はN-79°-Eである。北側に位置する SB 2 と梁行方位が揃う。

柱穴 17基の柱穴から成る。平面形は、円形・梢円形のものが多い。径は 0.21m~0.71m、深さは 0.02m~0.34m である。SP142 に柱痕跡の可能性がある堆積が認められる。また、SP020・SP137・SP142 の底面に柱当たりが認められる。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 本遺構の東側約 0.2m に NR032 が位置することから、本遺構の時期は NR032 埋没後の中世と考える。また、SD022 との重複関係から、14世紀後葉以前と考える。

SB 2 (図12・13)

検出状況 E 2 ~ F 3 グリッド、III層上面で検出した。

規模・形状 衍行3間 (5.48m、柱間 1.74m~1.96m)、梁行2間 (4.18m、柱間 1.96m~2.22m)、床面積 22.9 m² の総柱建物と考える。長軸方位はN-11°-Wである。

柱穴 11基の柱穴から成る。平面形は、円形・梢円形のものが多い。径は 0.26m~0.74m、深さは 0.05m~0.43m である。柱痕跡と考えられる堆積は確認できなかった。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 本遺構の梁行方位が SB 1 の長軸方位と同じであることから、本遺構の時期は SB 1 と同時期の中世で、14世紀後葉以前と考える。

2 柱穴列

SA 1 (図14・18)

検出状況 G 2 ~ G 4 グリッド、III層上面で検出した。4基の柱穴がほぼ等間隔に配置されることから、柱穴列とした。

規模・形状 3間 (6.16m、柱間 1.88m~2.28m) である。長軸方位はN-79°-Eである。

柱穴 4基の柱穴から成る。平面形は、それぞれ円形に近い形状である。径は 0.36m~0.74m、深さは 0.13m~0.22m である。柱痕跡や柱当たりは確認できなかった。

遺物出土状況 SP097 の埋土から灰釉陶器 1 点が出土した。

出土遺物 1 は灰釉陶器の皿で、器形から東山 72 号窯式～百代寺窯式と併行する時期と考えられる。

時期 出土遺物から、本遺構の時期は 11世紀以降と考える。

SA 2 (図15)

検出状況 G 3 ~ G 4 グリッド、III層上面で検出した。3基の柱穴がほぼ等間隔に配置されることから、柱穴列とした。

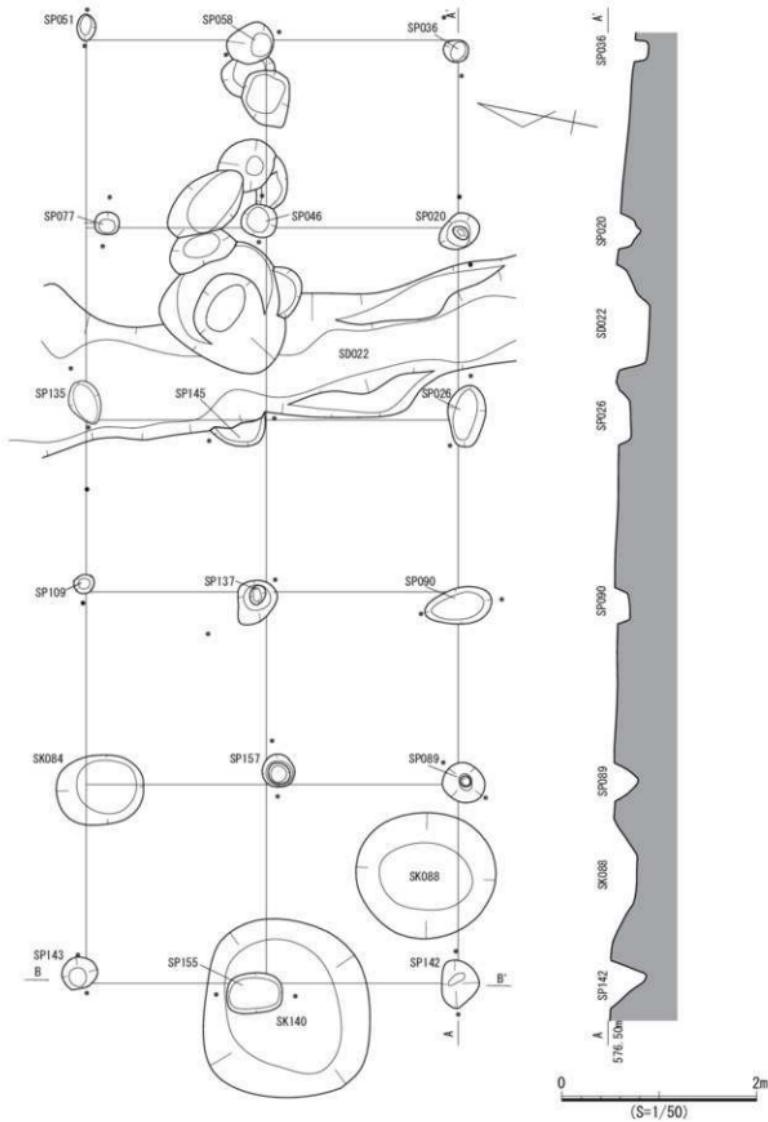


図9 SB 1遺構図(1)

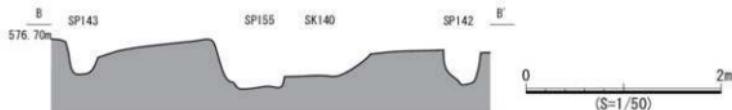


図 10 SB 1 遺構図（2）

規模・形状 2間（5.86m、柱間2.82m～3.04m）である。長軸方位はN-75°-Eである。

柱穴 3基の柱穴から成る。平面形は、SP019のみ方形に近い形狀である。径は0.27m～0.40m、深さは0.13m～0.21mである。柱痕跡や柱当たりは確認できなかつた。

遺物出土状況 遺物は出土しなかつた。

時期 長軸方位がSA 1と似ることから、本遺構の時期はSA 1と同時期の11世紀以降と考える。

3 土坑

SK005（図16・18）

検出状況 F 7グリッド、III層上面で検出した。遺構の東半は発掘区外に続く。

形状 東側が発掘区外に続いたため、平面形は不明である。底面は平らで、断面の傾斜は北側は急である。南側は急であるが、1層からは緩やかに開く。

埋土 3層に分層した。2層はブロック土を含む。

遺物出土状況 埋土中から弥生土器・土師器7点、灰釉陶器4点が散在して出土した。

出土遺物 2点を図示した。2と3は古代の土師器で、2は碗、3は有台坏である。

時期 灰釉陶器が出土することから、本遺構の時期は平安時代以前と考える。

SK018（図16・18）

検出状況 F 5～F 6グリッド、III層上面で検出した。SK012・SK017・NR032と重複し、SK012より古く、SK017・NR032より新しい。

形状 平面形は不定形である。底面は凸凹で、断面の傾斜は北側に段があり、それ以外は緩やかに開く。

埋土 2層に分層した。1層、2層ともブロック土を含む。

遺物出土状況 埋土中から弥生土器・土師器14点、須恵器3点、中世陶磁器2点、石器・石製品2点が散在して出土した。

出土遺物 2点を図示した。4は土師器で、古代の甕である。5は中国産磁器（青磁）で、龍泉窯系の碗である。

時期 青磁や古瀬戸鉢皿が出土していることから、本遺構の時期は中世と考える。

SK068（図16・18）

検出状況 F 3グリッド、III層上面で検出した。

形状 平面形は円形である。底面は丸く、断面の傾斜は緩やかに開く。

埋土 単層である。

遺物出土状況 埋土中から中国産磁器（青磁）1点が出土した。

出土遺物 6は中世磁器（青磁）で、龍泉窯系II a類の碗である。

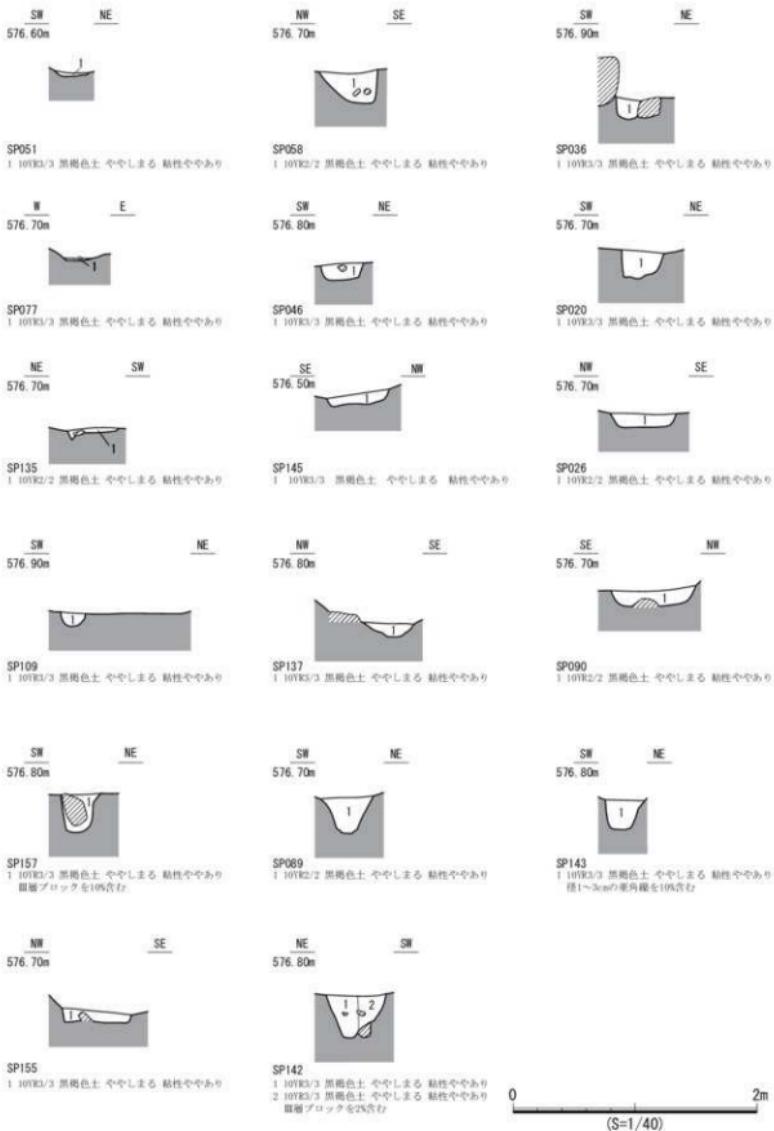


図 11 SB 1 遺構図 (3)

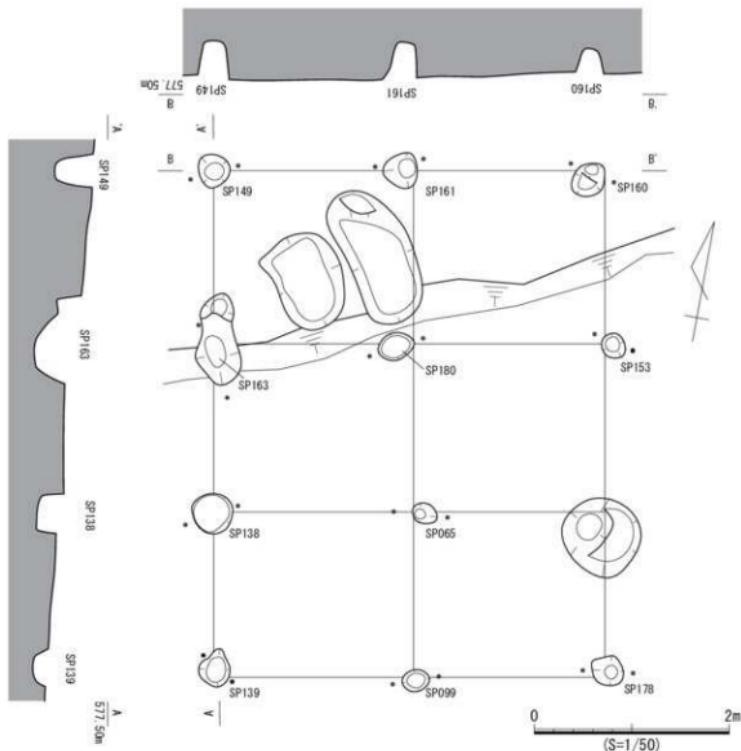


図 12 SB 2 遺構図（1）

時期 出土遺物から、本遺構の時期は13世紀前半以降と考える。

SK088（図16・18）

検出状況 G 3グリッド、III層上面で検出した。

形状 平面形は円形である。底面は2段になっており、断面の傾斜は東西とも段があり、その後緩やかに開く。

埋土 2層に分層した。水平堆積である。

遺物出土状況 埋土中から中世磁器（青磁）1点が出土した。

出土遺物 7は中国産磁器の青磁で、龍泉窯系IIa類の碗である。

時期 出土遺物から、本遺構の時期は13世紀前半以降と考える。

SK126（図16・18）

検出状況 I 2グリッド、III層上面で検出した。遺構の南半は発掘区外に続く。

形状 南側が発掘区外に続いたため、平面形は不明である。底面は平らで、断面の傾斜は西側は緩やか

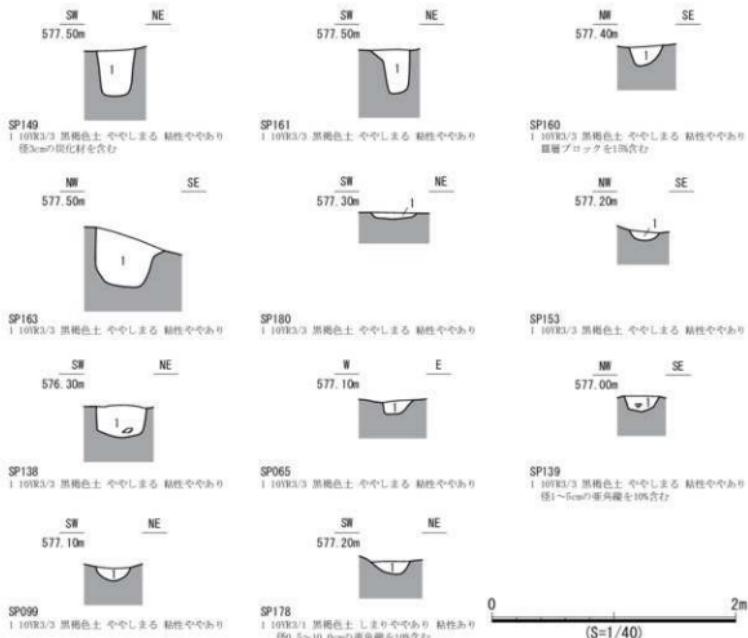


図13 SB2遺構図(2)

に開く。東側は段があり、その後開いて立ち上がる。

埋土 単層である。

遺物出土状況 埋土中から石器・石製品(砥石)1点が出土した。

出土遺物 8は紙石である。

時期 周辺遺構の時期を踏まえると、本遺構の時期は中世以前と考える。

4 溝

SD022(図17・18)

検出状況 C3~I5グリッド、III層上面で検出した。H4グリッドでは段切り造成による削平を受けていることから、遺構が一部途切れていますが、一連の遺構とした。SB1の柱穴であるSP145と重複し、本遺構が新しい。

規模・形状 全長28.73mの南北方向の溝である。発掘区の中央や西側を蛇行するように位置しており、南端は発掘区外に延びる。A-A'断面では幅1.69m、深さ0.51m、B-B'断面では幅1.41m、深さ0.36m、C-C'断面では幅1.64m、深さ0.41mである。底面はA-A'断面からB-B'断面にかけては丸く、C-C'断面付近では底が2段となる。壁面は、A-A'断面からB-B'断面にかけては急に立ち上がり、C-C'断面付近では緩やかに開く。

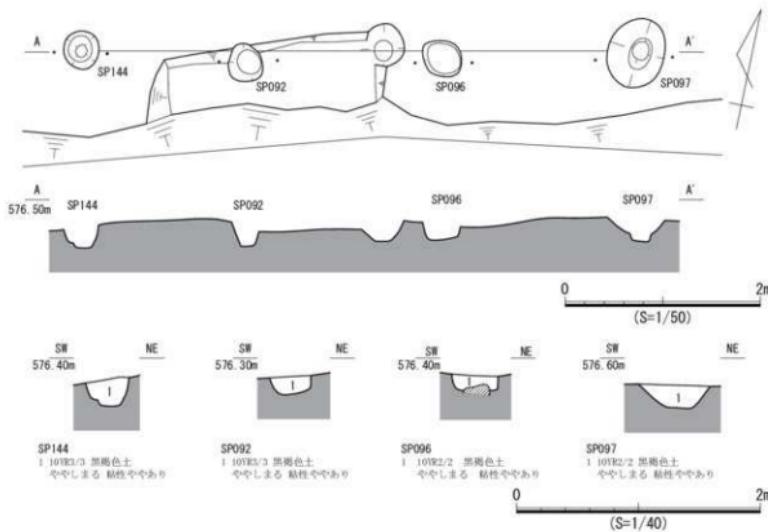


図 14 SA 1 遺構図

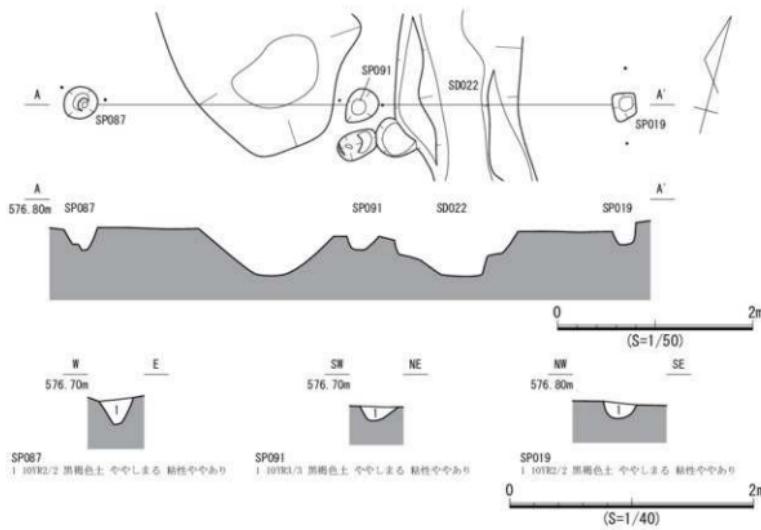


図 15 SA 2 遺構図

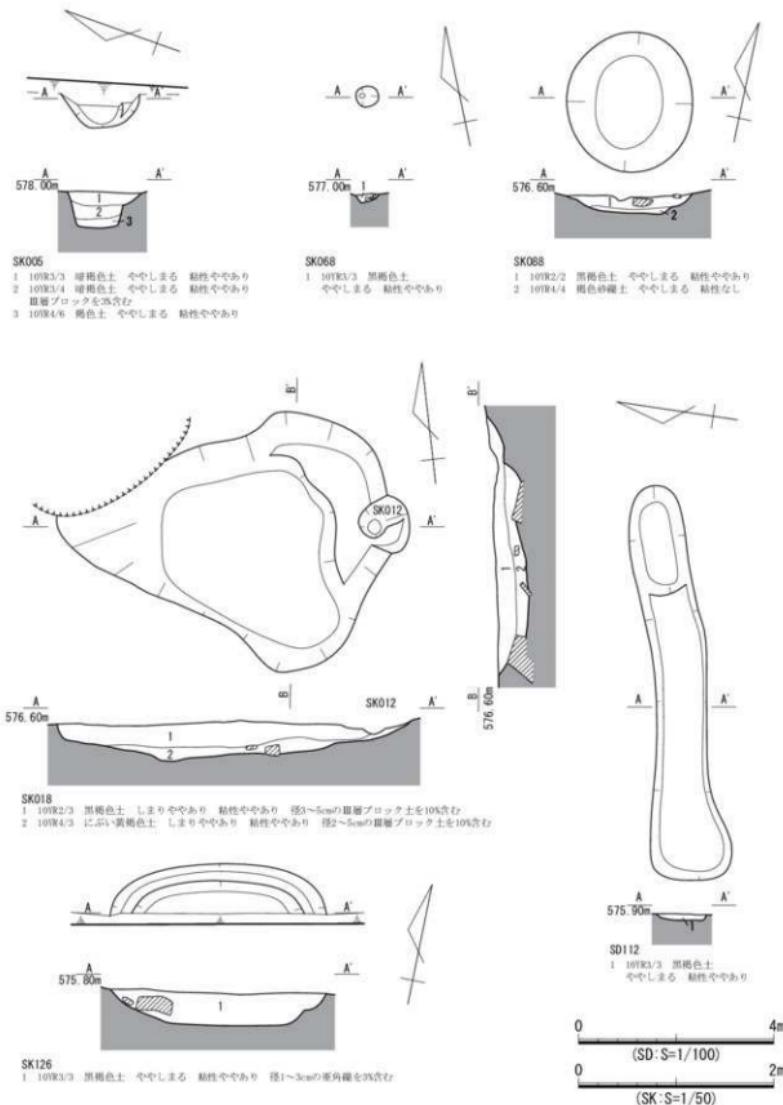


図 16 SK・SD 遺構図

埋土 A-A' 断面は3層、**B-B'** 断面は2層に分層した。**A-A'** 断面2層は直径10cm~20cmの亜角礫を含む。**A-A'** 断面3層、**B-B'** 断面2層は褐色砂礫土である。**C-C'** 断面は2層に分層した。埋土は黒褐色土又は黒色土であり、直径1.0cm~5.0cmの亜角礫を含む。

遺物出土状況 埋土中から縄文土器1点、弥生土器・土師器15点、中世陶器1点が散在して出土した。

出土遺物 4点を図示した。9~11は弥生土器で、9・10は弥生時代中期の横羽状文甕、11は弥生時代終末期の有段口縁甕である。12は古瀬戸後Ⅰ期の浅碗である。

時期 出土遺物の最新の時期である12から、本遺構の時期は14世紀後葉以前と考える。

SD112(図16・18)

検出状況 I3~I4グリッド、III層上面で検出した。

規模・形状 全長8.13mの東西方向の溝である。発掘区の南西に位置する。**A-A'** 断面では幅1.01m、深さ0.12mである。底面は平らで東側がやや深くなる。断面の傾斜は緩やかに開く。

埋土 単層である。

遺物出土状況 埋土中から須恵器1点、中世陶器2点、金属製品1点が散在した。

出土遺物 2点を図示した。13・14は古瀬戸で、古瀬戸後Ⅰ期の卸皿と擂鉢型小鉢である。

時期 出土遺物のうち最新の時期である13・14から、本遺構の時期は14世紀後葉頃と考えられる。

5 自然流路と自然流路内出土遺物

自然流路の堆積層中からは、弥生土器、土師器・須恵器を中心に縄文時代から古代までの遺物が出土した。自然流路は人為的に掘削された遺構ではないが、遺構の立地や時期を考える上で重要な資料となるため、項を設け説明する。

NR017(図17・19・20)

検出状況 F5~I6グリッド、標高576.4mから575.8m程の高さのIII層上面で検出した。南側が低くなる緩傾斜地である。NR032と重複し、本遺構が古い。

規模・形状 発掘区の中央に位置しており、南端は発掘区外に延びる。自然流路の最大上端幅は6.60mである。平面形は不正形である。底面は西側が段状になる。壁面の傾斜は西側が緩やかで、東側は急である。

埋土 2層(**E-E'** 断面4層・5層)に分層した。いずれも砂礫土であり、4層が東側に傾いて堆積する。

遺物出土状況 埋土中から縄文土器8点、弥生土器・土師器274点、須恵器191点、灰釉陶器38点、石器・石製品6点が散在して出土した。

出土遺物 39点を図示した。15~26は土師器である。15~18は古墳時代前期の高坏である。19~26は7世紀末頃の甕と考えられる。27~50は須恵器である。27~30は壺蓋である。27は城山2号窯式で、平坦な天井部をもち、体部は垂直に立ち上がる。28・29は美濃須衛Ⅳ期第3小期、30は美濃須衛Ⅳ期第3小期併行の在地産である。31・32は壺蓋で、31は美濃須衛Ⅲ期前半、32は美濃須衛Ⅳ期第3小期~V期第1小期である。33~35は壺身で、33は蝮ヶ池窯式併行の畿内系、34・35は美濃須衛Ⅲ期後半である。36~39は無台坏である。36・37は美濃須衛Ⅳ期第1小期で、36は鉢写し、37は佐波理碗写しである。38は折戸10号窯式、39是在地産と考える。39は底部内面が摩耗している。40~

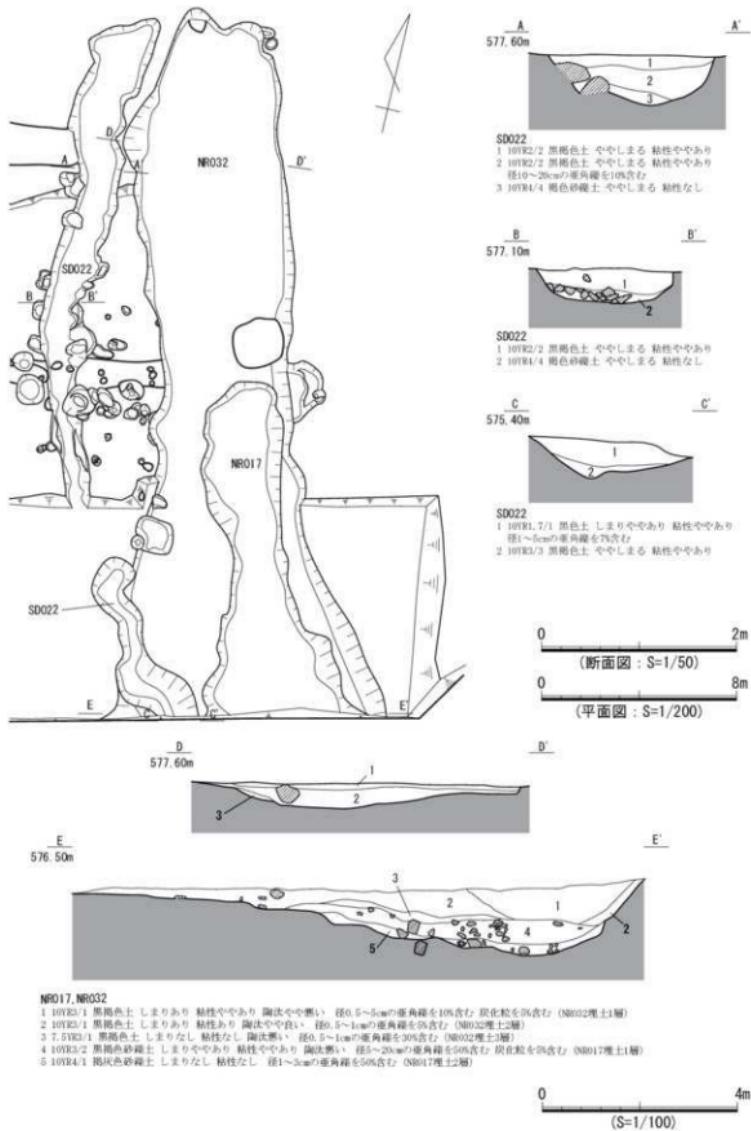


図 17 SD・NR 遺構図

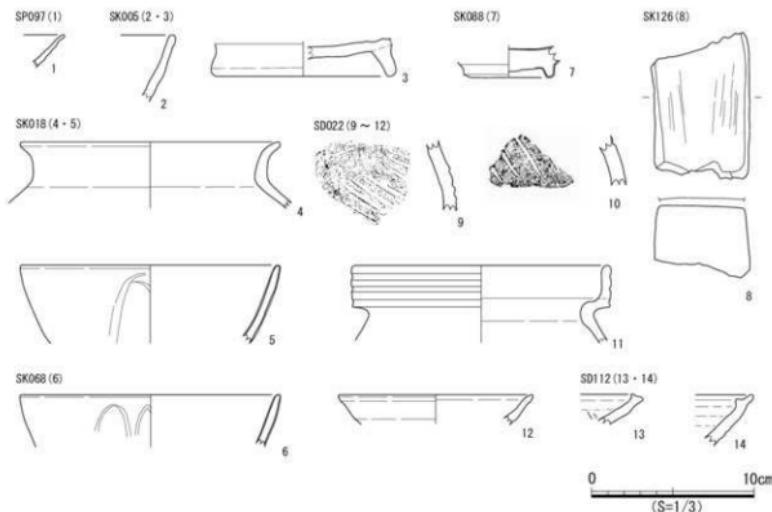


図18 SP・SK・SD出土遺物

42は有台坏で、40は鳴海32号窯式、41・42は美濃須衛IV期第3小期である。43は岩崎17号窯式併行の尾張系の壺である。44～46は短頸壺で、44は岩崎17号窯式併行の在地産、45・46は折戸10号窯式である。47は美濃須衛IV期第2小期併行の在地産の横瓶である。48・49は壺で、48は岩崎25号窯式～折戸10号窯式、49は折戸10号窯式である。50は美濃須衛窯産の甕である。51～53は石器である。51はスクレイバー、52は打製石斧、53は磨製石斧である。

時期 灰釉陶器が出土していることから、本遺構の時期は平安時代以前と考える。

NR032 (図17・21・22)

検出状況 C4～I6グリッド、標高577.5mから575.8m程の高さのⅢ層上面で検出した。南側が低くなる緩傾斜地である。NR017と重複し、本遺構が新しい。

規模・形状 発掘区の中央に位置しており、南端は発掘区外に続く。自然流路の最大上端幅は11.68mである。平面形は不正形である。底面は凸凹で、断面の傾斜は西側が緩やかで、東側が急である。
埋土 D-D'断面は2層、E-E'断面は3層に分層した。埋土はいずれも黒褐色土であり、1層はD-D'断面付近では薄く堆積するが、E-E'断面付近では2層・3層とは別の落ち込みとなっている。

遺物出土状況 埋土中から繩文土器2点、弥生土器・土師器384点、須恵器110点、灰釉陶器18点、石器・石製品3点が散在して出土した。

出土遺物 40点を図示した。54～81は古墳時代前期の土師器である。54～69は高坏で、55・56・59は外面に鉄滓が融着している。70・71は壺、72～80は甕、81は瓶の把手である。82～92は須恵器である。82～84は坏蓋で、82は東山11号窯式併行、83・84は美濃須衛IV期第3小期である。85は蝮ヶ池窯式の坏身である。86は美濃須衛IV期第3小期の有台坏である。87～89は美濃須衛III期後半の

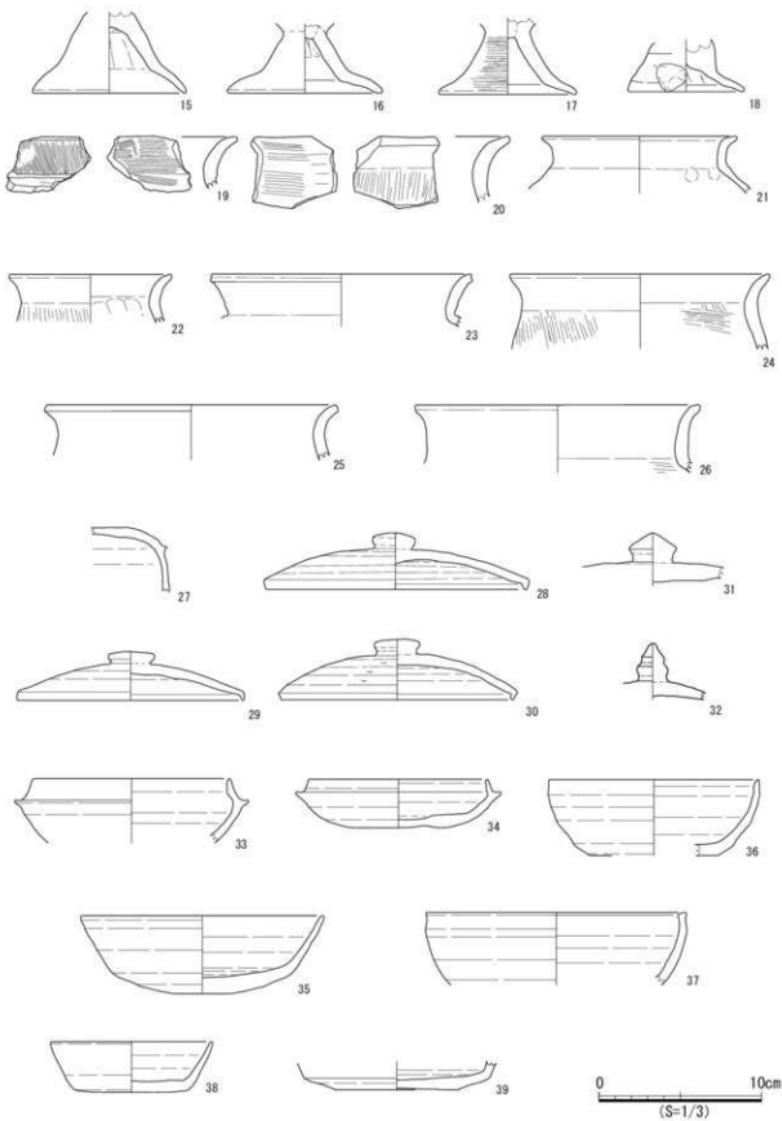


図 19 NR017 出土遺物 (1)

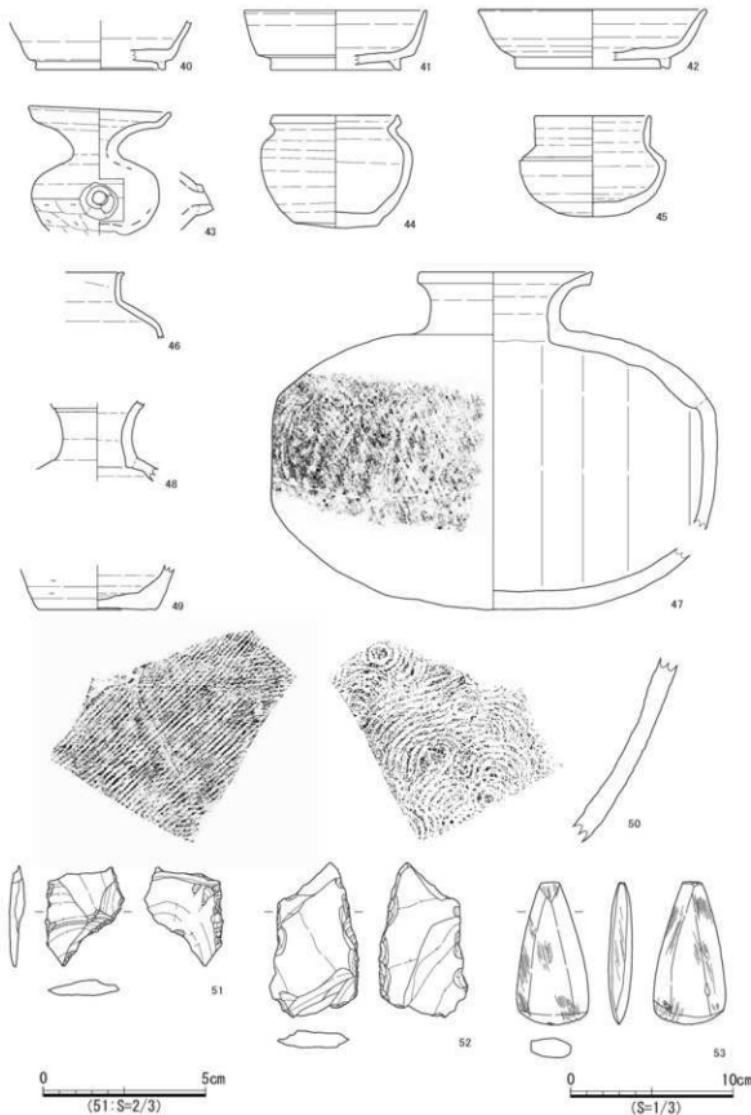


図20 NR017 出土遺物(2)

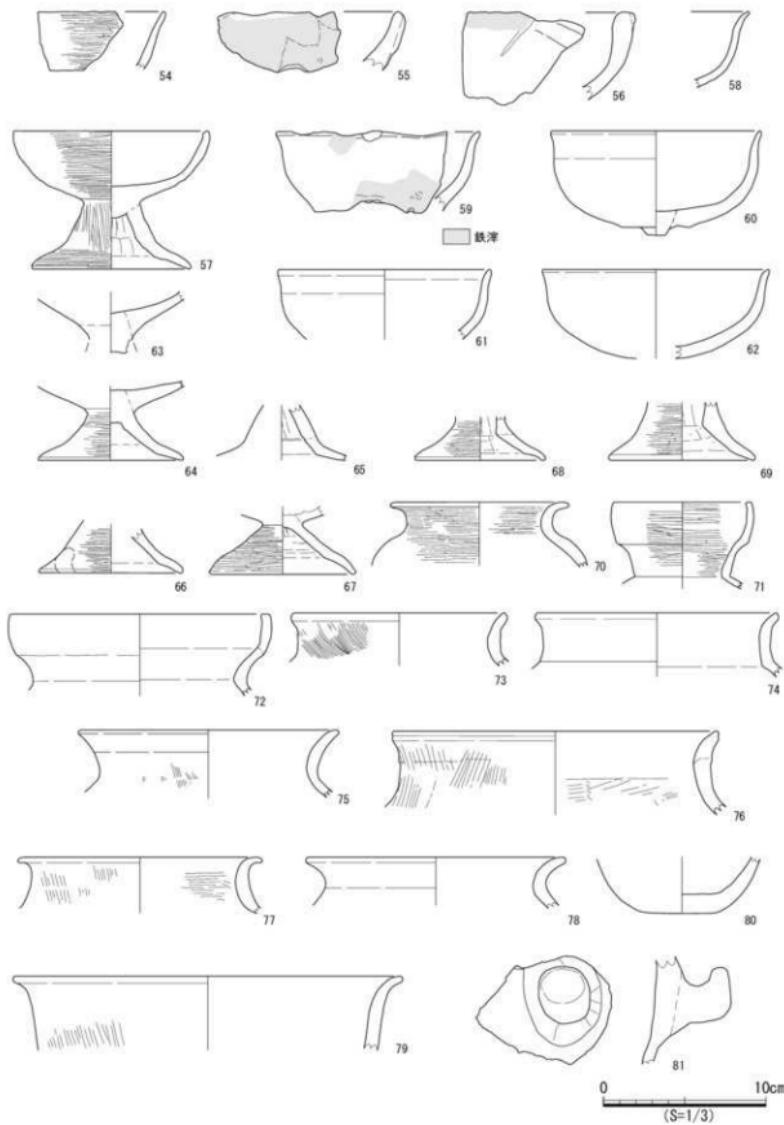


図 21 NR032 出土遺物 (1)

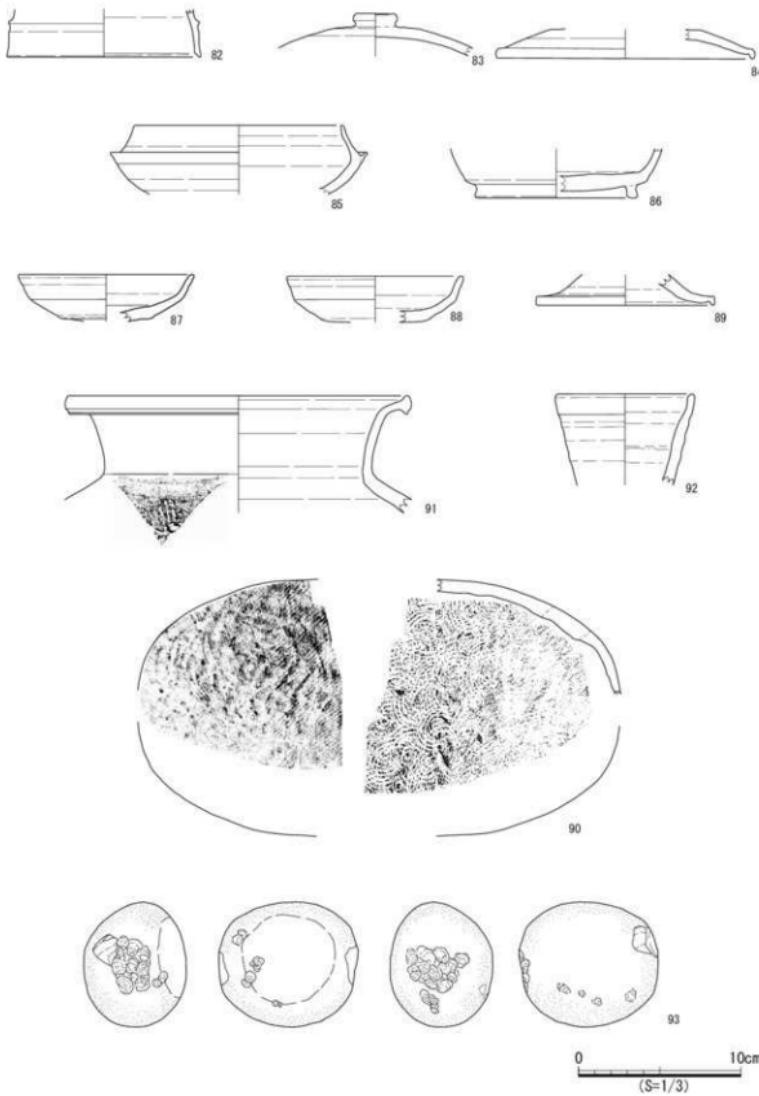


図22 NR032 出土遺物(2)

高坏である。90 は美濃須衛IV期第2小期の横瓶である。91 は美濃須衛窯産の甕である。92 は灰釉陶器の瓶類である。93 は石器で、磨石・敲石類である。

時期 灰釉陶器が出土していることから、本遺構の時期は平安時代以前と考える。また、重複関係から、NR017 より新しい。

6 遺構外出土遺物（図 23～25）

比較的残存状態が良い遺物、時期が判明した遺物などを中心に 38 点を図示した。

94～97 は縄文時代早期前半の深鉢である。外面に 94 は撚糸文、95・96 は山形文、97 は楕円文を施す。98～100 は土師器の無台坏である。101～112 は須恵器である。101 は美濃須衛IV期第2小期の坏蓋で、内面に煤が付着しており、灯明皿として使用された可能性がある。102～104 は坏身である。102 は東山 44 号窯式、103 は東山 44 号窯式併行の畿内系、104 は美濃須衛III期後半である。105～108 は無台坏で、105 は美濃須衛III期後半、106 は美濃須衛IV期第1小期併行の在地産、107 は美濃須衛V期第1小期併行の在地産、108 は美濃須衛V期第2小期併行の在地産である。106 は底面に墨書きがあるが、判読不能である。109 は猿投窯産の古代の横瓶である。110～112 は甕で、110 は古代の美濃須衛窯産、111 は東山 44 号窯式併行の在地産、112 は美濃須衛II期～III期である。113～122 は灰釉陶器である。113～119 は百代寺窯式併行の碗である。120 は百代寺窯式併行の皿、121 は百代寺窯式併行の瓶類、122 は東山 72 号窯式～百代寺窯式併行の壺である。123 は古瀬戸後IV期古段階の端反碗である。124 は中国産磁器の青磁で、龍泉窯系の碗である。125～130 は石器・石製品である。125 は楔形石器、126 は RF、127 は石核、128 は打製石斧、129 は磨石・敲石類である。130 は御物石器である。頭部・尾部を敲打により平坦にしている。底面にも敲打痕が認められるが、それほど平坦ではない。頭部と尾部の間は剥離敲打により抉りを入れる。

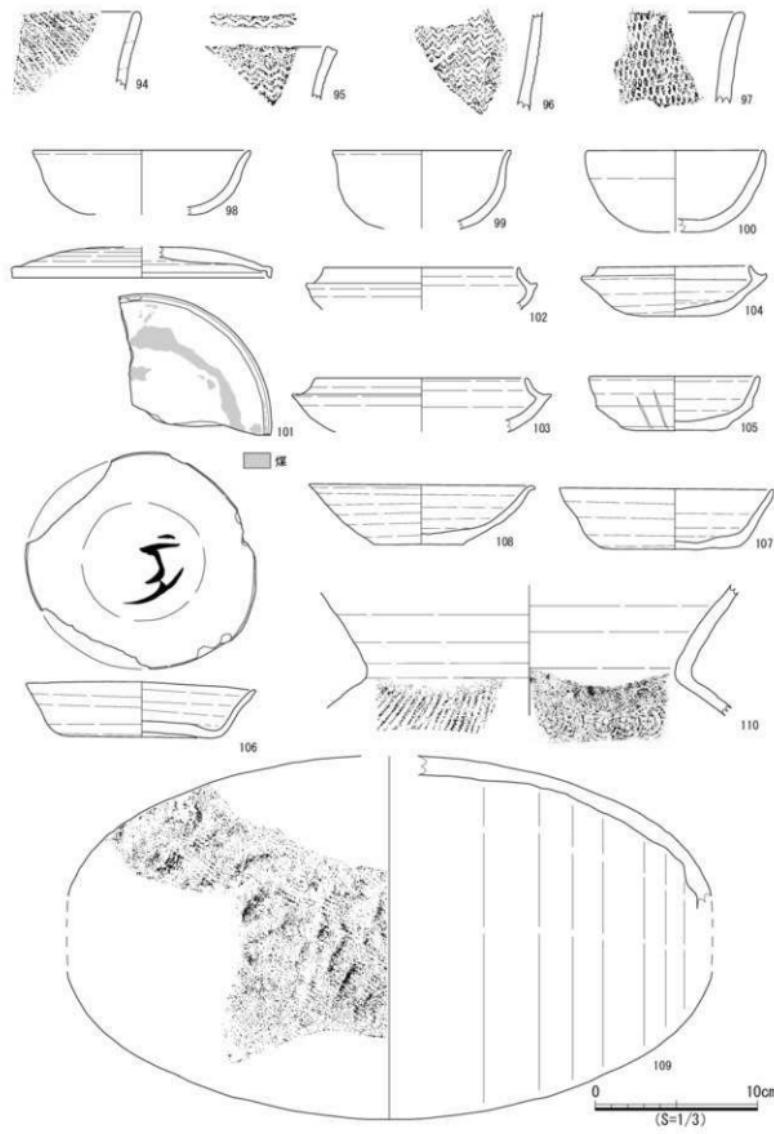


図23 遺構外出土遺物（1）

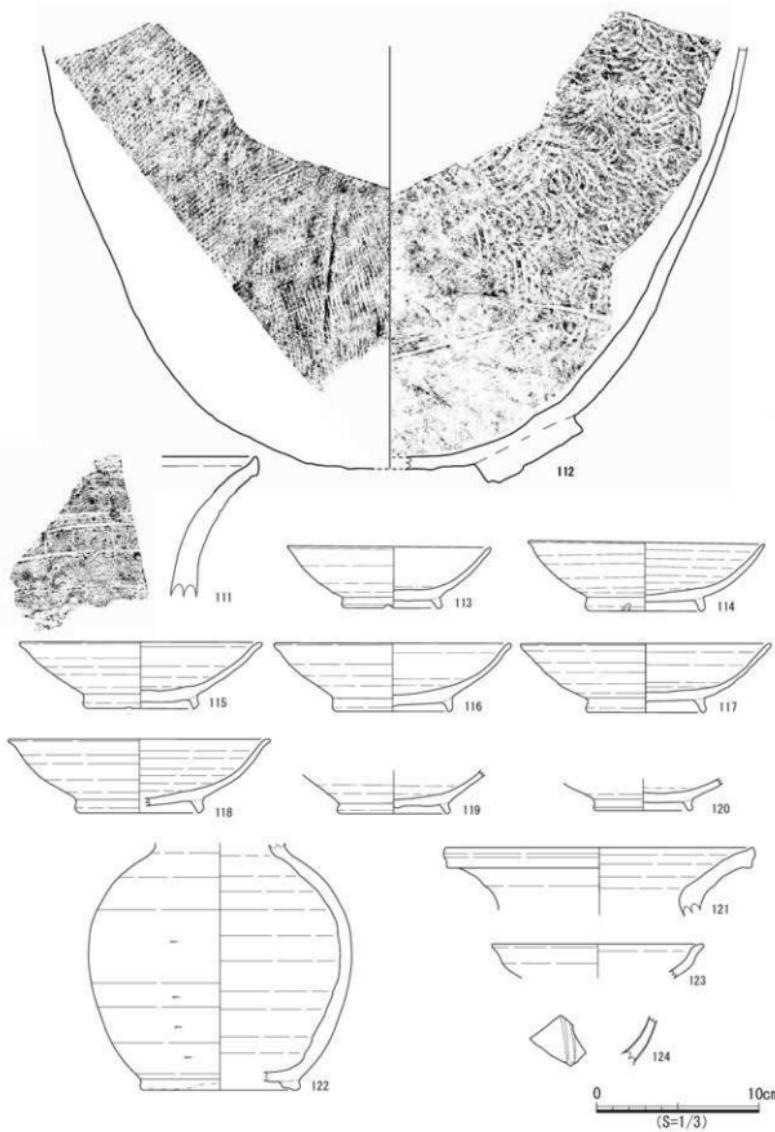


図24 遺構外出土遺物(2)

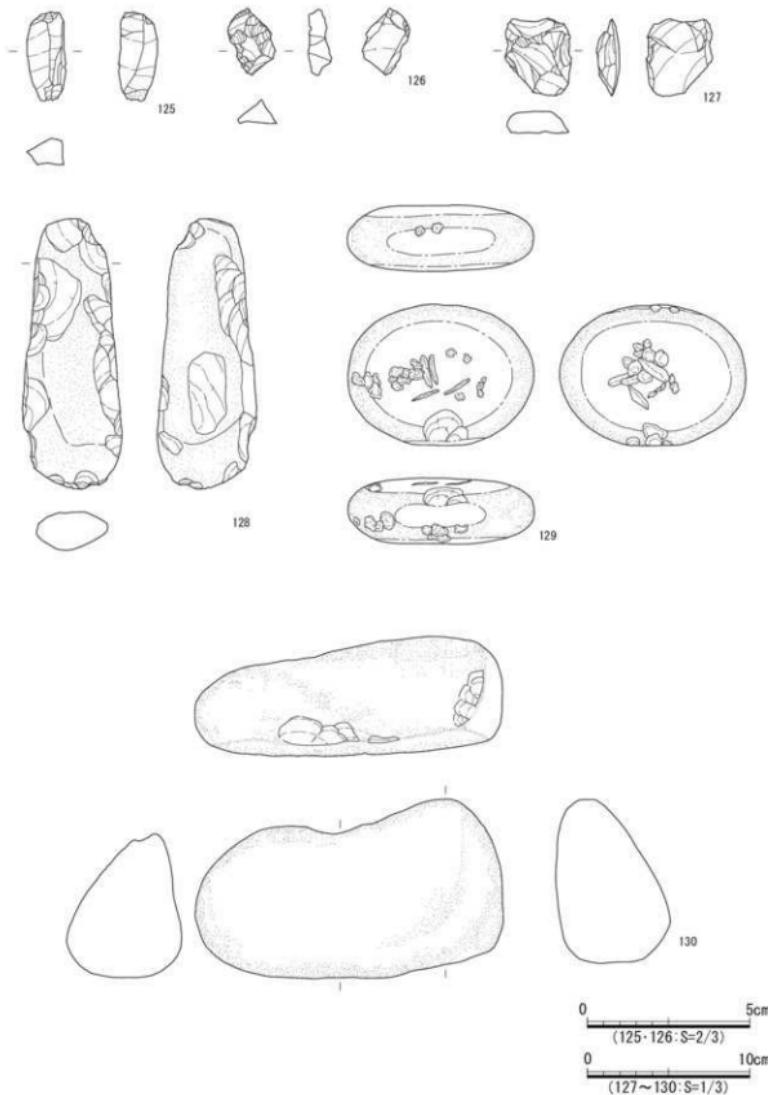


図25 造構外出土遺物（3）

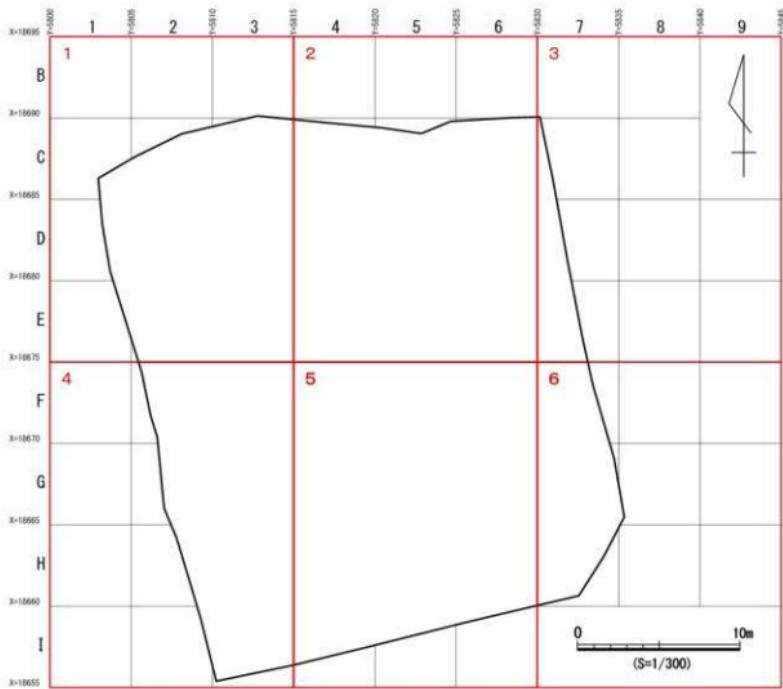


図 26 発掘区図面割り図

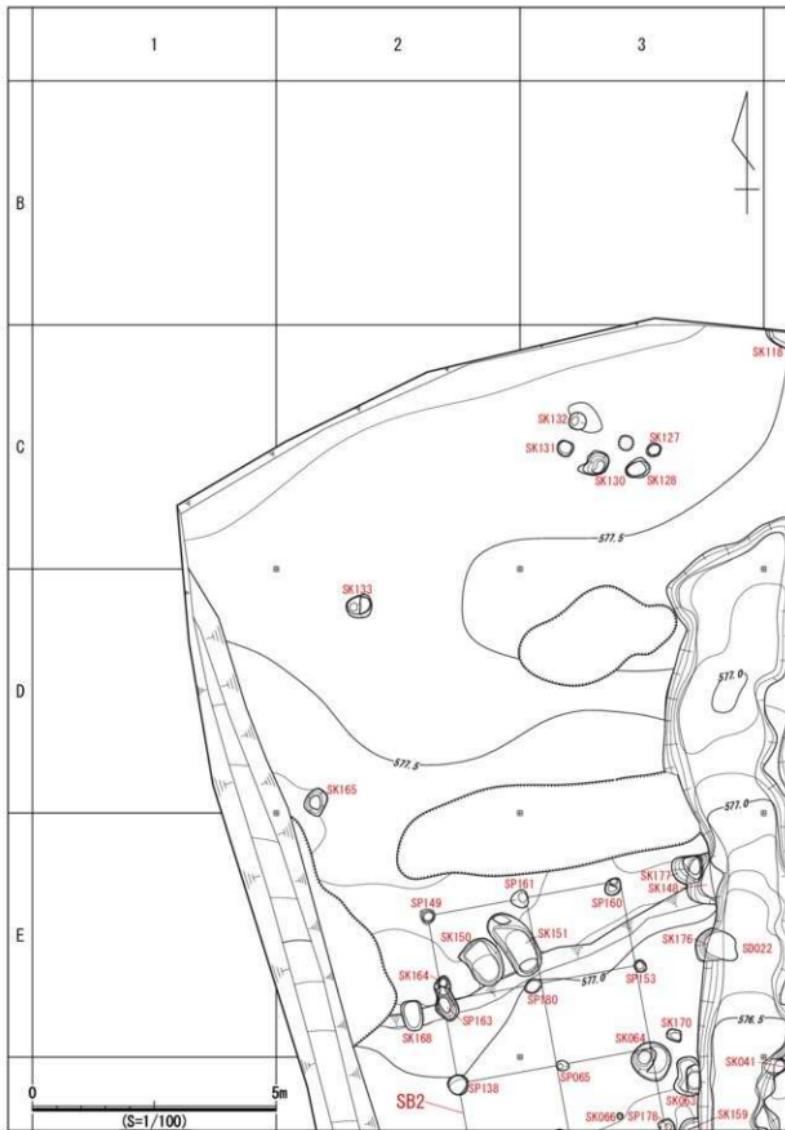


図27 発掘区全域図分割図(1)

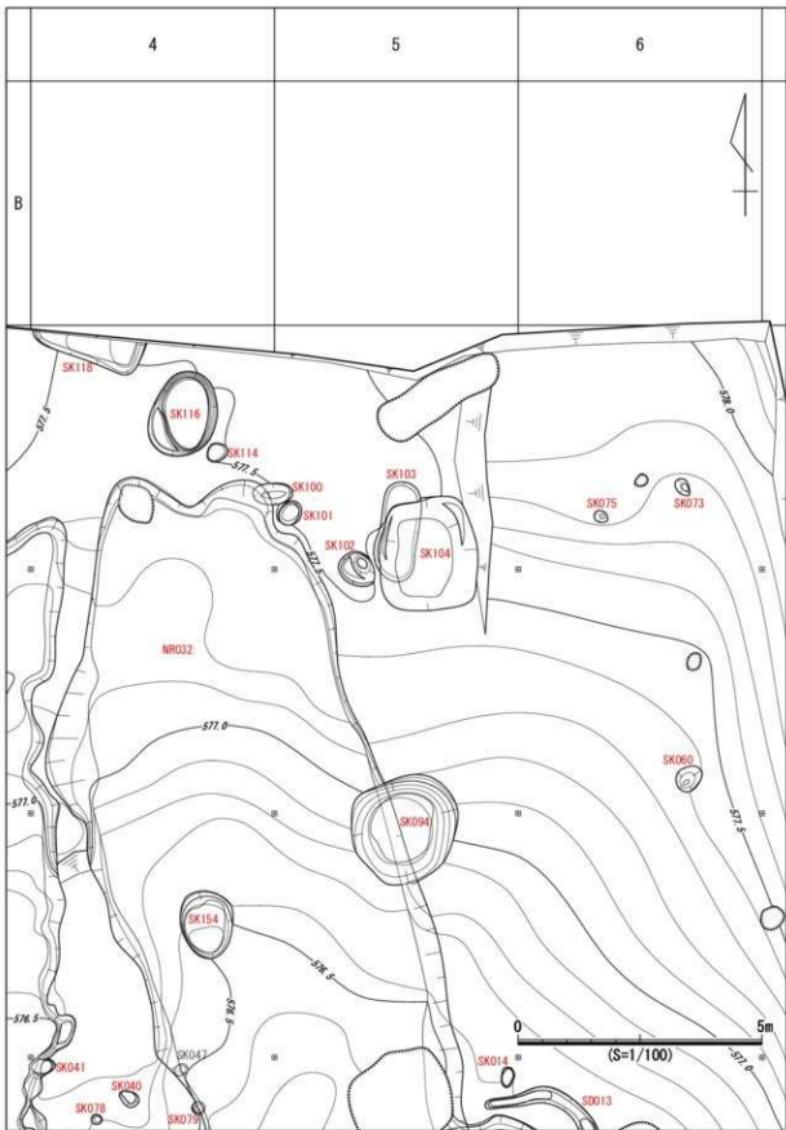


図28 発掘区全城図分割図（2）

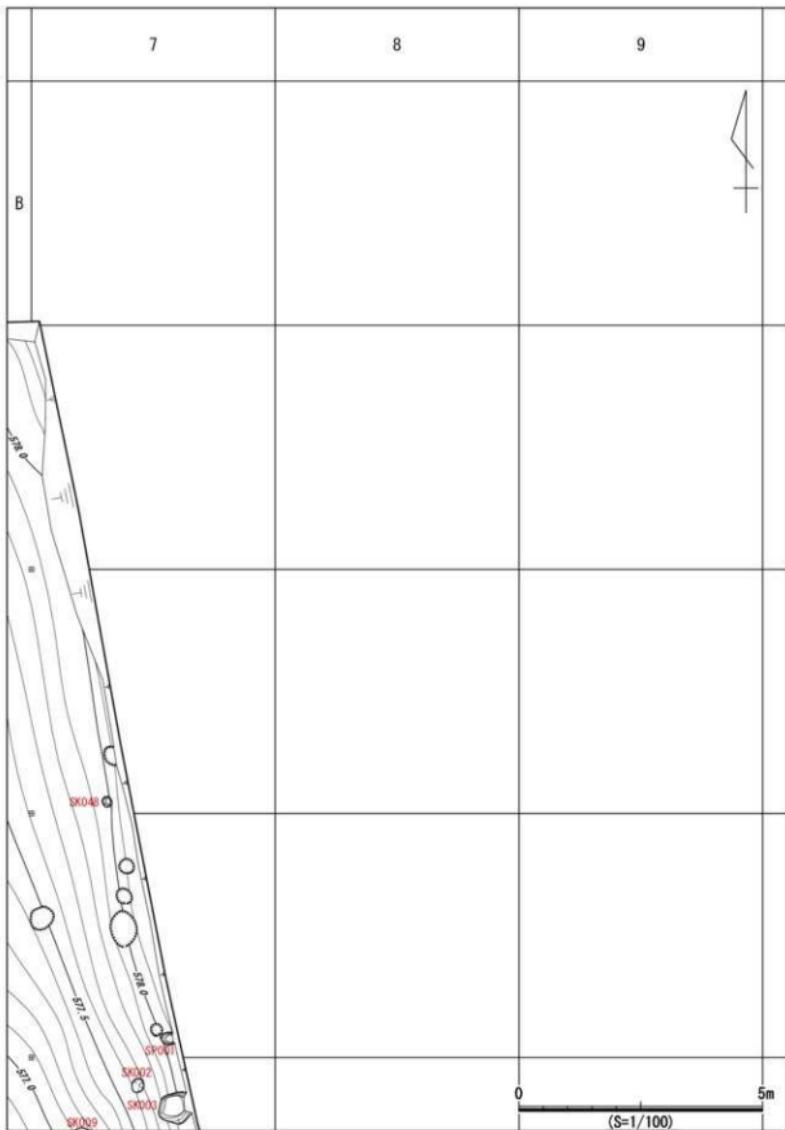


図29 発掘区全域図分割図（3）

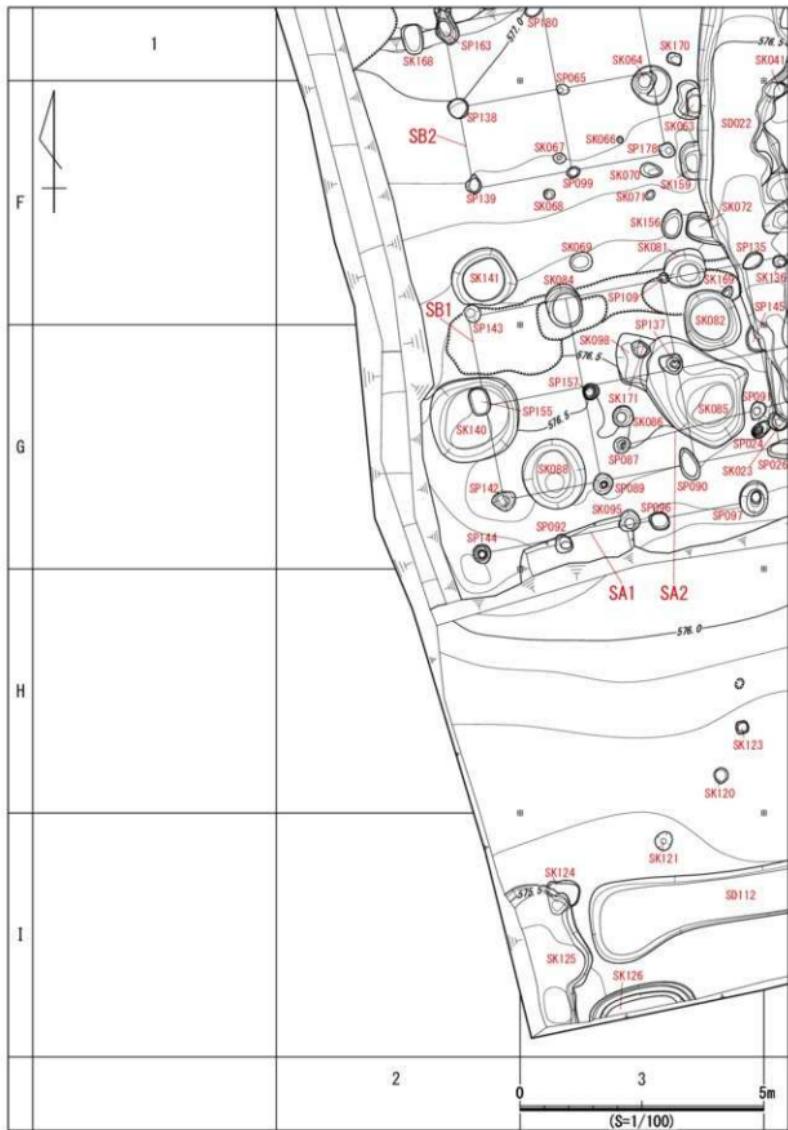


図 30 発掘区全城図分割図 (4)

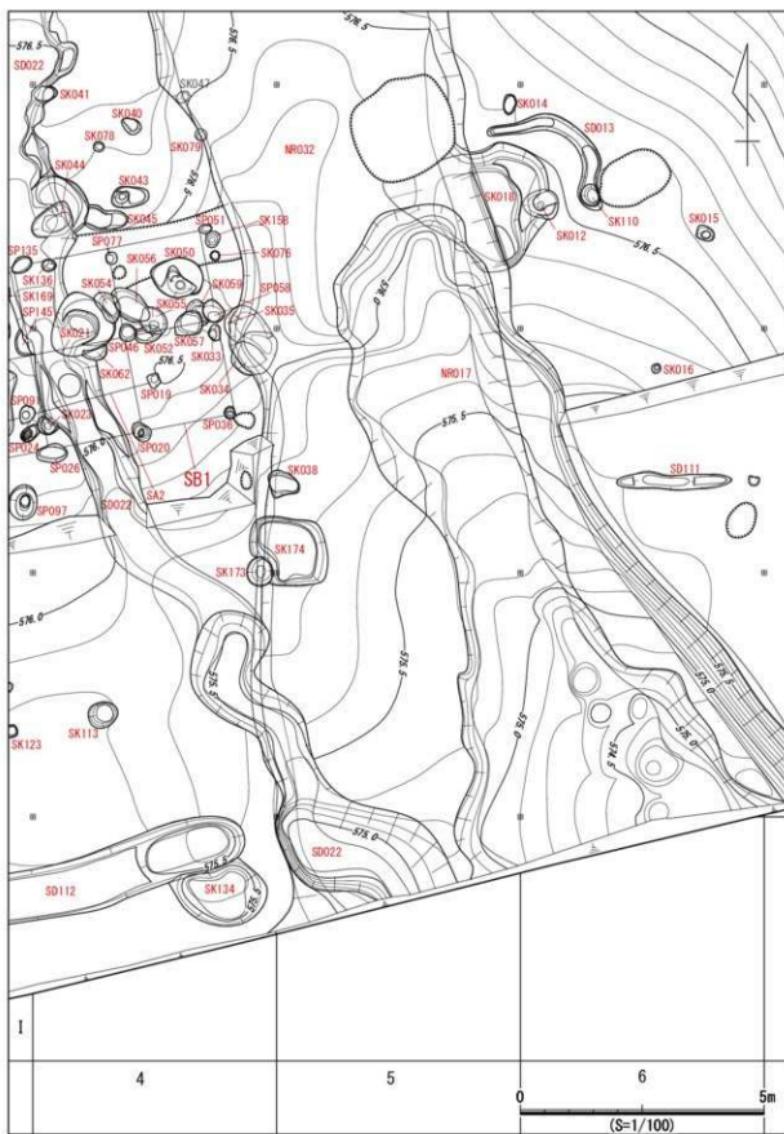


図31 発掘区全域図分割図 (5)



図32 発掘区全城図分割図（6）

表17 土器類観察表（1）

査定番号	出土位置	層位	器種	大きさ(cm)		地土	構成	色調	成形・調整・施文・施錫等	検査番号	図版番号
				口径	底径						
1	SP097	a	灰釉陶器 盤	口徑 底径 脚高	(2.6)	密	良好	内外面：灰白色(2.517/1)	内外面回転ナデ	18	5
2	SK005	a	土師器 碗	口徑 底径 脚高	(4.1)	密	普通	内外面：灰白色(10YR8/2)	外面ナデ、内外面煤付蓋	18	5
3	SK005	a	土師器 有合坏	口徑 底径(10.8) 脚高(2.3)		密	不良	外面：灰白色(10YR8/2) 外面：灰白色(2.518/2)	外面回転ナデ。高台貼付。内外面煤付蓋	18	5
4	SK018	1	土師器 甕	口徑(16.0) 底径 脚高(1.1)		砂や粗	普通	内面：浅黄褐色(10YR8/4) 外面：に赤い褐色(7.5YR7/4)	内外面ナデ	18	5
5	SK018	1	青磁 甕	口徑(16.0) 底径 脚高(1.8)		密	良好	内外面：オーリーブ灰(10Y5/2)（釉薬）	内外面回転ナデ、外面落書き文（残なし）、内外面施錫	18	8
6	SK068	a	青磁 甕	口徑(16.0) 底径 脚高(3.2)		密	良好	内外面：オーリーブ灰(10Y5/2)（釉薬）	内外面回転ナデ、外面落書き文（残なし）、内外面施錫	18	5
7	SK088	1	青磁 甕	口徑 底径(6.6) 脚高(1.9)		密	良好	内面：明オーリーブ灰色(5Y7/1)（釉薬） 外面：灰白色(10YR7/1), 明瞭灰斑(7.5Y7/1)（釉薬）	内外面回転ナデ、高台貼付。外面回転ケズリ、内外面施錫	18	5
9	SD022	b	弥生土器 横柄灰文甕	口徑 底径 脚高(1.4)		密	普通	内面：浅黄褐色(10YR8/3) 外面：暗褐色(10YR3/2)	内面ナデ、外面ナデのち沈漫文	18	5
10	SD022	c	弥生土器 横柄灰文甕	口徑 底径 脚高(3.0)		砂や粗	普通	内外面：浅黄褐色(10YR8/3)	内面ナデ、外面ナデのち沈漫文	18	5
11	SD022	b	弥生土器 有段灰縁甕	口徑(16.0) 底径 脚高(1.7)		密	普通	内面：褐色(7.5YR4/3) 外面：黒褐色土(10YR3/3)	内外面ナデ、外面沈漫文	18	5
12	SD022	c	古窯戸 浅甕	口徑(12.6) 底径 脚高(1.8)		密	良好	内外面：浅黄色(2.517/3)（釉薬）	回転ナデ、内外面施錫	18	5
13	SD112	a	古窯戸 鉢皿	口徑 底径 脚高(1.8)		密	良好	内面：灰白色(5Y7/2), 浅黄色(2.517/3)（釉薬） 外面：灰白色(2.517/1)	内外面回転ナデ。即日、内面施錫	18	5
14	SD112	a	古窯戸 椎輪型小鉢	口徑 底径 脚高(3.0)		密	良好	内面：赤褐色(5YR4/6) 外面：明赤褐色(2.5YR5/6)	内外面回転ナデ	18	5
15	MR017	2	土師器 高杯	口徑 底径(9.4) 脚高(5.1)		密	普通	内面：褐色(5YR6/8) 外面：明褐色(1.5YR5/6)	内外面ナデ	19	
16	MR017	2	土師器 高杯	口徑 底径(9.6) 脚高(4.3)		密	普通	内面：に赤い水褐色(5YR5/4) 外面：褐色(5YR6/6)	内外面ナデ（外面大半削減）	19	
17	MR017	2	土師器 高杯	口徑 底径(8.4) 脚高(4.7)		密	普通	内面：褐色(5YR6/8) 外面：明赤褐色(5YR5/6)	内外面ナデ（内面大半削減）、 外面ガサ	19	
18	MR017	1	土師器 高杯	口徑 底径(7.2) 脚高(3.2)		密	普通	内面：灰褐色(7.5YR5/2) 外面：褐色(5YR6/1)	内外面ナデ、外面施錫削れ	19	6
19	MR017	2	土師器 甕	口徑 底径 脚高(3.2)		砂や粗	普通	内面：に赤い黄褐色(10YR8/4) 外面：褐色(7.5YR6/6)	内面ナデ、内外面ハケ	19	
20	MR017	a	土師器 甕	口徑 底径 脚高(4.2)		砂や粗	普通	内面：浅黄褐色(10YR8/3) 外面：に赤い黄褐色(10YR6/3)	内外面ヨコナデ、ハケ	19	
21	MR017	2	土師器 甕	口徑(12.6) 底径 脚高(3.5)		砂や粗	良好	内外面：褐色(5YR7/6)	内外面ヨコナデ、内面指オサエ	19	
22	MR017	-	土師器 甕	口徑(10.0) 底径 脚高(3.6)		砂や粗	普通	内面：灰黃褐色(10YR4/2) 外面：褐色(10YR4/1)	内外面ヨコナデ、内面指オサエ、 外面ハケ	19	
23	MR017	2	土師器 甕	口徑(16.0) 底径 脚高(3.2)		砂や粗	普通	内面：に赤い黄褐色(10YR7/4) 外面：明褐色(1.5YR7/6)	内外面ヨコナデ	19	
24	MR017	1	土師器 甕	口徑(18.6) 底径 脚高(3.4)		砂や粗	普通	内外面：灰白色(10YR8/1)	内面ナデ、内外面ヨコナデ、内 外面ハケ	19	
25	MR017	c	土師器 甕	口徑(18.6) 底径 脚高(3.4)		砂や粗	普通	内外面：浅黄色(2.517/3)	内外面ヨコナデ	19	

表18 土器類観察表（2）

開拓番号	出土位置	部位	器種	大きさ(cm)		胎土	焼成	色調	成形・調整・施文・施釉等	牌印番号	図版番号
				口径	底径						
26	NB017	1	土師器 甕	口径(17.6) 底径(4.1) 器高(4.1)		やや粗	普通	内面：にぶい黄褐色(10YR7/4) 外面：オリーブ黒色(5Y3/1)	内外面コロナデ、内面ハケ	19	
27	NB017	2	土師器 甕	口径 — 底径 — 器高(4.0)		密	良好	内面：黄灰色(2.5Y5/1) 外面：灰オリーブ色(5Y6/2)	内外面回転ナデ、外面回転ケズリ、自然袖付着	19	
28	NB017	1	土師器 甕	口径(16.0) 底径 — 器高(4.0)		密	良好	内外面：灰黄色(2.5Y7/2)	内外面回転ナデ、天井部回転ケズリ	19	6
29	NB017	1	土師器 甕	口径(14.0) 底径 — 器高(4.0)		密	良好	内外面：灰白色(2.5Y7/1)	内外面回転ナデ、内面静止ナデ、外面部部付着ナデ、外面回転ケズリ	19	
30	NB017	2	土師器 甕	口径(14.4) 底径 — 器高(3.7)		密	良好	内外面：黄褐色(2.5Y6/1)	内外面回転ナデ、外面回転ケズリ	19	6
31	NB017	2	土師器 甕	口径 — 底径 — 器高(3.0)		密	良好	内面：灰白色(10Y8/1) 外面：灰白色(10Y8/1), 灰オリーブ色(7.5Y5/3)	内外面回転ナデ、内面上げナデ、外面回転ケズリ	19	
32	NB017	1	土師器 甕	口径 — 底径 — 器高(3.4)		密	良好	内面：灰白色(10Y7/1) 外面：灰黄色(2.5Y6/2)	内外面回転ナデ、外面自然袖付着	19	
33	NB017	1	土師器 甕	口径(12.2) 底径 — 器高(4.0)		密	良好	内外面：灰(10Y5/1)	内外面回転ナデ	19	
34	NB017	b	土師器 甕	口径(11.0) 底径(1.9) 器高(3.0)		密	良好	内面：灰白色(10Y7/1) 外面：黄褐色(2.5Y6/1)	内外面回転ナデ、外面回転ケズリ	19	
35	NB017	2	土師器 甕	口径(15.0) 底径(9.9) 器高(6.8)		密	良好	内外面：灰白色(10Y7/1)	内外面回転ナデ、底部回転ケズリ	19	6
36	NB017	—	土師器 無台坪	口径(13.0) 底径(7.0) 器高(4.7)		密	良好	内外面：灰白色(10Y8/1)	内外面回転ナデ	19	
37	NB017	1	土師器 無台坪	口径(16.0) 底径 — 器高(4.5)		密	良好	内面：灰(7.5Y6/1) 外面：緑灰色(7.5G7/1)	内外面回転ナデ、外面部部付着	19	
38	NB017	2	土師器 無台坪	口径(16.0) 底径(5.6) 器高(4.1)		密	良好	内面：にぶい黄色(2.5Y6/4) 外面：灰黄色(2.5Y6/2)	内外面回転ナデ、外面部部付着	19	
39	NB017	1	土師器 無台坪	口径 — 底径(7.6) 器高(1.8)		密	普通	内面：灰褐色(2.5Y5/2) 外面：にぶい黄色(7.5Y6/4)	内外面回転ナデ、底部回転系切刃	19	
40	NB017	1	土師器 有台坪	口径 — 底径(7.9) 器高(3.0)		密	良好	内面：灰白色(10Y7/1) 外面：灰(5Y5/1)	内外面回転ナデ、高台付	20	
41	NB017	1	土師器 有台坪	口径(11.2) 底径(8.0) 器高(3.7)		密	良好	内面：灰色(7.5Y6/1) 外面：灰色(7.5Y5/1)	内外面回転ナデ、外面部部付着	20	
42	NB017	1, 2	土師器 有台坪	口径(14.1) 底径(9.4) 器高(3.6)		密	良好	内外面：灰白色(2.5Y7/1)	内外面回転ナデ、外面部部付着	20	
43	NB017	2	土師器 甕	口径(6.6) 底径 — 器高(7.8)		密	良好	内外面：灰褐色(7.5Y4/2)	内外面回転ナデ、外面部部付着	20	6
44	NB017	2	土師器 短細壺	口径(7.7) 底径(5.2) 器高(6.9)		やや粗	良好	内外面：オリーブ色(7.5Y3/1) 外面：灰褐色(7.5Y6/2)	内外面回転ナデ、外面部部付着	20	6
45	NB017	2	土師器 短細壺	口径(7.2) 底径(4.4) 器高(6.2)		密	良好	内外面：灰(2.5Y6/2) 外面：灰(10Y4/1)	内外面回転ナデ、外面部部付着	20	6
46	NB017	2	土師器 短細壺	口径 — 底径 — 器高(4.0)		密	良好	内面：灰白色(10Y7/1) 外面：灰(5Y7/1), 灰オリーブ色(5Y6/2)	内外面回転ナデ	20	
47	NB017	1, 2	土師器 短細壺	口径(10.6) 底径 — 器高(2.4)		やや粗	良好	内面：灰白色(2.5Y7/1) 外面：灰白色(7.5Y6/1)	内外面回転ナデ、外面部部付着	20	6
48	NB017	2	土師器 甕	口径 — 底径 — 器高(4.8)		密	良好	内面：灰褐色(2.5Y6/1) 外面：灰(5Y4/1)	内外面回転ナデ	20	
49	NB017	2	土師器 甕	口径 — 底径(7.30) 器高(2.5)		密	良好	内面：灰褐色(5Y5/0) 外面：灰オリーブ色(5Y4/2)	内外面回転ナデ、外面部部付着	20	

表19 土器類觀察表（3）

南紀 番号	出土 位置	部位	器種	大きさ(cm)		胎土	焼成	色調	成形・調整・施文・施釉等	揮因 番号	因版 番号
				口径 底径 高さ	口径 底径 高さ						
50	MR017	1, 2	須恵器 燒	口径 - 底径 - 高さ(1, 2)	口径 - 底径 - 高さ(1, 2)	密	良好	内面：灰白色(5Y7/1) 外面：黃灰色(2, 5Y6/1)	内面同心円当て具板、外面平行 タタケ板	20	
54	MR032	-	土師器 高杯	口径 - 底径 - 高さ(3, 5)	口径 - 底径 - 高さ(3, 5)	密	普通	内面：にじみ赤褐色(5YR4/4) 外面：赤褐色(5YR4/6)	内面ナガ。外面ミガキ	21	5
55	MR032	-	土師器 高杯	口径 - 底径 - 高さ(3, 7)	口径 - 底径 - 高さ(3, 7)	密	良好	内面：明赤褐色(2, 5YR5/6) 外面：赤褐色(2, 5YR4/11)	内面ナガ。外面鐵洋刷着	21	5
56	MR032	-	土師器 高杯	口径 - 底径 - 高さ(4, 4)	口径 - 底径 - 高さ(4, 4)	密	普通	内外面：明赤褐色(2, 5YR5/6)	内外面ナガ。外面鐵洋刷着	21	5
57	MR032	-	土師器 高杯	口徑(12.0) 底径(9.0) 高さ(6.5)	口徑(12.0) 底径(9.0) 高さ(6.5)	密	普通	内面：明赤褐色(2, 5YR5/6) 外面：赤褐色(2, 5YR4/6)	内外面ミガキ、内面ナガ	21	6
58	MR032	-	土師器 高杯	口径 - 底径 - 高さ(4, 6)	口径 - 底径 - 高さ(4, 6)	密	普通	内外面：にじみ赤褐色(5YR4/20)	内外面ナガ	21	5
59	MR032	-	土師器 高杯	口径 - 底径 - 高さ(4, 9)	口径 - 底径 - 高さ(4, 9)	密	普通	内面：明赤褐色(2, 5YR5/6) 外面：赤褐色(5YR4/6)	内外面ナガ。外面鐵洋刷着	21	5
60	MR032	-	土師器 高杯	口径(12.9) 底径 - 高さ(6.0)	口径(12.9) 底径 - 高さ(6.0)	密	普通	内面：明赤褐色(5YR5/6) 外面：棕色(5YR6/9)	内外面ナガ	21	
61	MR032	-	土師器 高杯	口径(13.0) 底径 - 高さ(6.3)	口径(13.0) 底径 - 高さ(6.3)	密	普通	内外面：棕色(5YR6/9)	内外面ナガ	21	
62	MR032	1	土師器 高杯	口径(14.0) 底径 - 高さ(5.5)	口径(14.0) 底径 - 高さ(5.5)	密	普通	内面：増赤褐色(5YR3/6) 外面：明赤褐色(2, 5YR5/6)	内外面ミガキ(大手壓紋)	21	5
63	MR032	-	土師器 高杯	口径 - 底径 - 高さ(3.8)	口径 - 底径 - 高さ(3.8)	密	良好	内面：明赤褐色(2, 5YR5/6) 外面：にじみ褐色(7, 5YR5/3)	内外面ナガ	21	5
64	MR032	-	土師器 高杯	口径 - 底径(6.0) 高さ(4.6)	口径 - 底径(6.0) 高さ(4.6)	密	普通	内面：棕色(5YR6/6) 外面：棕色(5YR6/8)	内面ナガ。外面ミガキ、外面磨 減	21	6
65	MR032	-	土師器 高杯	口径 - 底径 - 高さ(3.4)	口径 - 底径 - 高さ(3.4)	密	普通	内面：黄褐色(7, 5YR8/6) 外面：棕色(5YR6/6)	内外面ナガ	21	5
66	MR032	-	土師器 高杯	口径 - 底径(6.8) 高さ(3.2)	口径 - 底径(6.8) 高さ(3.2)	密	良好	内面：にじみ小褐色(5YR5/4) 外面：明赤褐色(5YR5/6)	内面ナガ。外面上ミガキ	21	6
67	MR032	-	土師器 高杯	口径 - 底径(9.0) 高さ(4.1)	口径 - 底径(9.0) 高さ(4.1)	密	良好	内面：棕色(2, 5YR6/6) 外面：明赤褐色(2, 5YR5/6)	内面ナガ。内面ケズリ、外面上 ミガキ、外面ミ黒斑	21	6
68	MR032	-	土師器 高杯	口径 - 底径(9.0) 高さ(2.7)	口径 - 底径(9.0) 高さ(2.7)	密	良好	内外面：明赤褐色(2, 5YR5/6)	内面ナガ。内面ケズリ、外面上 ミガキ	21	5
69	MR032	-	土師器 高杯	口径 - 底径(9.0) 高さ(3.6)	口径 - 底径(9.0) 高さ(3.6)	密	良好	内外面：明赤褐色(2, 5YR5/6)	内外面ナガ。内面ケズリ、外面上 ミガキ	21	5
70	MR032	-	土師器 壺	口径(11.0) 底径 - 高さ(3.9)	口径(11.0) 底径 - 高さ(3.9)	密	良好	内面：明赤褐色(5YR5/8) 外面：明赤褐色(5YR5/6)	内面ナガ。内外面上ミガキ	21	
71	MR032	-	土師器 壺	口径(9.4) 底径 - 高さ(5.5)	口径(9.4) 底径 - 高さ(5.5)	密	普通	内外面：明赤褐色(5YR5/6)	内面ナガ。内外面上ミガキ	21	
72	MR032	-	土師器 壺	口径(16.0) 底径 - 高さ(5.0)	口径(16.0) 底径 - 高さ(5.0)	やや粗	普通	内面：にじみ黄褐色(10YR6/4) 外面：棕色(7, 5YR6/6)	内外面ナガ	21	
73	MR032	-	土師器 壺	口径(13.0) 底径 - 高さ(3.1)	口径(13.0) 底径 - 高さ(3.1)	やや粗	普通	内面：灰白色(10YR8/1) 外面：灰黃褐色(10YR5/2)	内外面ナガ。外面ハケ、外面煤 付着	21	
74	MR032	-	土師器 壺	口径(14.7) 底径 - 高さ(4.2)	口径(14.7) 底径 - 高さ(4.2)	やや粗	普通	内面：浅黃褐色(7, 5YR6/4) 外面：黄褐色(7, 5YR6/6)	内外面ナガ	21	
75	MR032	-	土師器 壺	口径(16.0) 底径 - 高さ(4.0)	口径(16.0) 底径 - 高さ(4.0)	やや粗	普通	内面：棕色(7, 5YR7/6) 外面：灰黄色(7, 5YR7/2)	内外面ヨコナガ。外面ハケ	21	
76	MR032	-	土師器 壺	口径(20.0) 底径 - 高さ(5.1)	口径(20.0) 底径 - 高さ(5.1)	やや粗	普通	内面：灰白色(2, 5YR5/2) 外面：浅黄色(2, 5YR7/3)	内面ナガ。内外面上ミガキ	21	

表20 土器類観察表(4)

開拓番号	出土位置	層位	器種	大きさ(cm)		胎土	焼成	色調	成形・調整・施文・施釉等	標団番号	団版番号
				口径	底径						
77	NR032	I	土師器 甕	口径(15.0) 底径(1.5)	高さ(3.5)	密	良好	内面: 淡色(5Y6/6) 外面: 橙色(7.5YR7/6)	内面ナデ、内外面ハケ	21	
78	NR032	I	土師器 甕	口径(16.0) 底径(1.5) 高さ(3.2)		やや粗	普通	内面: 黑色(5Y2/1) 外面: 灰灰色(10YR6/1)	内外面ナデ、内外面焼付付	21	
79	NR032	I	土師器 甕	口径(24.0) 底径(4.0) 高さ(4.5)		やや粗	普通	内面: 灰蓝色(2.5YI2/2) 外面: 浅黄色(2.5YR7/3)	内外面ナデ、外面ハケ	21	
80	NR032	I	土師器 甕	口径(14.0) 底径(3.5) 高さ(3.5)		密	普通	内面: 黄灰黑色(2.5YR5/1) 外面: 閑灰色(10YR6/1)	内外面ナデ	21	
81	NR032	I	土師器 甕	口径(13.0) 底径(6.6) 高さ(6.6)		やや粗	普通	内外面: 淡黄色(2.5YR8/4)	内外面ナデ	21	
82	MR032	-	乳出器 环甕	口径(12.0) 底径(3.0) 高さ(3.0)		密	良好	内面: 淡灰色(10YR5/1) 外面: 暗灰色(10YR6/1)	内外面回転ナデ	22	
83	MR032	-	乳出器 环甕	口径(14.0) 底径(2.8) 高さ(2.6)		密	良好	内外面: 暗灰色(10YR6/1)	内外面回転ナデ、外面焼付貼付ナデ、回転ケズリ	22	
84	MR032	-	乳出器 环甕	口径(15.8) 底径(1.8) 高さ(1.8)		密	良好	内外面: 暗灰色(10YR6/1)	内外面回転ナデ、外面焼付ケズリ	22	
85	MR032	I	乳出器 环身	口径(12.0) 底径(4.3) 高さ(4.3)		密	良好	内面: 灰黄色(2.5Y6/2) 外面: 暗色(5Y6/1)	内外面回転ナデ、外面回転ケズリ	22	
86	MR032	-	乳出器 台付	口径(19.9) 底径(3.6) 高さ(3.6)		密	良好	内面: 黄褐色(10YR6/2) 外面: 黄灰色(2.5Y6/1)	内外面回転ナデ、高台付目	22	
87	MR032	I	乳出器 环高	口径(10.8) 底径(2.8) 高さ(2.8)		密	良好	内外面: 暗色(5Y5/1)	内外面回転ナデ	22	
88	MR032	I	乳出器 環	口径(16.8) 底径(2.8) 高さ(2.8)		密	良好	内面: 暗色(5Y5/1) 外面: 黄灰色(2.5Y5/1)	内外面回転ナデ	22	
89	MR032	-	乳出器 高环	口径(11.0) 底径(2.0) 高さ(2.0)		密	普通	内面: 暗白色(10YR8/1) 外面: 暗灰色(2.5Y5/1)	内外面回転ナデ	22	
90	MR032	-	乳出器 環底	口径(12.0) 底径(2.0) 高さ(2.0)		密	良好	内面: 暗灰色(10YR5/1) 外面: 暗黄褐色(10YR5/2)	内面同心円凹凸具痕、外面平行タラキ	22	
91	NR032	I	乳出器 甕	口径(21.0) 底径(7.2) 高さ(7.2)		密	良好	内面: 黄灰色(2.5Y6/1) 外面: 暗色(5Y5/0)	内外面回転ナデ、内面同心円タタタのちナデ、外面平行タタキ	22	
92	NR032	I	灰陶器 瓶	口径(8.2) 底径(5.6) 高さ(5.6)		密	良好	内面: 灰灰褐色(2.5Y5/2) 外面: 暗白色(10YR7/1) 外面: 暗オリーブ色(3Y4/4)	内外面回転ナデ、内外面焼付	22	
94	F6	II	陶文土器 深鉢	口径 底径 高さ(4.8)		やや粗	普通	内面: に伝い褐色(7.5YR7/4) 外面: に伝い暗褐色(10YR5/2)	内面ナデ、内面指オサエ、外面押型文(捺文文)、外面焼付着	23	7
95	F6	II	陶文土器 深鉢	口径 底径 高さ(3.3)		密	良好	内面: 黑褐色(10YR2/1) 外面: に伝い暗褐色(10YR5/3)	内面ナデ、外面白口器部・瓶底押型文(山形文)	23	7
96	D6	II	陶文土器 深鉢	口径 底径 高さ(6.0)		密	良好	内面: 深褐色(10YR8/4) 外面: に伝い黄褐色(10YR7/4)	内面ナデ、外面白押型文(山形文)	23	7
97	F7	II	陶文土器 深鉢	口径 底径 高さ(5.6)		やや粗	普通	内外面: 橙色(7.5YR6/6)	内面調整ナデ、外面押型文(捺文文)	23	7
98	F4	II	土師器 無台所	口径(13.4) 底径(4.0) 高さ(4.0)		密	普通	内面: 淡色(5YR7/6) 外面: 橙色(7.5YR7/6)	内外面ナデ	23	
99	F4	II	土師器 無台所	口径(11.0) 底径(4.8) 高さ(4.8)		密	普通	内面: 橙色(7.5YR6/8) 外面: 橙色(7.5YR6/6)	内外面ナデ	23	
100	F4	II	土師器 無台所	口径(16.8) 底径(4.6) 高さ(5.6)		粗	普通	内面: 淡黄色(2.5Y6/3) 外面: 暗白色(2.5Y6/2)	内外面ナデ、外面下平磨滅	23	
101	G5	II	乳出器 环高	口径(15.8) 底径(1.9) 高さ(1.9)		密	良好	内面: 暗白色(5Y7/1) 外面: 暗色(10Y6/1)	内外面回転ナデ、外面回転ケズリ、焼付着	23	

表21 土器類觀察表（5）

南板 番号	出土 位置	層位	器種	大きさ(cm)	胎土	構成	色調	成形・調整・施文・施釉等		掲 示 番 号	図版 番 号
								口径 底径 器高			
102	G6	II	須恵器 环身	口径(12.0) 底径(1.0) 器高(2.5)	密	良好	内面：灰白色(10TB7/1) 外面：褐色(10TB5/1)	内外面回転ナデ	23		
103	G3	II	須恵器 环身	口径(12.0) 底径(1.0) 器高(2.0)	密	良好	内外面：灰色(5SY/1)	内外面回転ナデ	23		
104	G5	II	須恵器 环身	口径(4.4) 底径(2.2) 器高(1.1)	密	良好	内外面：灰白色(10TB7/1) 外面：灰オリーブ色(7.5SY/3)（自然釉）	内外面回転ナデ、外面部回転ケズ リ、自然釉付着	23	7	
105	B5	II	須恵器 無台杯	口径(10.4) 底径(5.2) 器高(3.5)	密	良好	内面：黄褐色(2.5SY/1) 外面：灰白色(10TB7/1)	内外面回転ナデ、外面部へラ 記付	23		
106	E5	II	須恵器 無台杯	口径(4.1) 底径(3.0) 器高(3.4)	密	良好	内面：灰白色(2.5SY/1) 外面：灰色(3SY/1)	内外面回転ナデ、内面底部に墨 書き、底部へラ記付調整、外面部 自然釉付着	23	7	
107	E5	II	須恵器 無台杯	口径(3.2) 底径(1.0) 器高(3.7)	密	普通	内外面：灰白色(10TB8/2)	内外面回転ナデ、外面部へラ 切り未調整	23	7	
108	D4	II	須恵器 無台杯	口径(13.9) 底径(6.6) 器高(3.7)	密	良好	内外面：明褐色(7.5SY/6)	内外面回転ナデ、外面部底回転 高切り	23	7	
109	H7	II	須恵器 横板	口径(2.8) 底径(2.2) 器高(2.4)	密	良好	内面：灰色(5SY/0) 外面：オーリーブ黒色(7.5SY/2)	内面回転ナデ、外面部平行タタキ	23	8	
110	E5	II	須恵器 燒	口径 底径 器高(8.0)	密	良好	内面：灰褐色(10TB6/2) 外面：灰・黄褐色(10TB6/3)	内外面回転ナデ、内面同心円当 て具置、外面部平行タタキ	23		
111	E6	II	須恵器 燒	口径 底径 器高(8.6)	密	良好	内外面：灰色(7.5SY/1)	内外面回転ナデ、外面部双文と 横凹向の次離	24		
112	E5	II	須恵器 燒	口径 底径(10.0) 器高(26.6)	密	良好	内面：褐色(10TB6/1) 外面：灰褐色(10TB6/2)	内面同心円当て具置、ナダのち へラ切り、外面部平行タタキ	24	8	
113	E6	II	灰釉陶器 碗	口径(12.5) 底径(7.6) 器高(2.8)	密	良好	内外面：灰白色(2.5SY/1) 外面：灰褐色(10SY/20)	内外面回転ナデ、外面部底回転 ケズリ、高台貼付	24		
114	E6	II	灰釉陶器 碗	口径(4.6) 底径(3.9) 器高(2.2)	密	良好	内外面：灰黄色(2.5Y7/2)	内外面回転ナデ、外面部底回転 ケズリ、高台貼付	24	7	
115	E6	II	灰釉陶器 碗	口径(5.0) 底径(4.6) 器高(2.1)	密	良好	内外面：灰黄色(2.5Y7/2)	内外面回転ナデ、外面部底回転 ケズリ、高台貼付	24	7	
116	E6	II	灰釉陶器 碗	口径(4.6) 底径(7.0) 器高(2.2)	密	良好	内外面：灰黄色(2.5Y7/2)	内外面回転ナデ、外面部底回転 ケズリ、高台貼付	24		
117	E7	II	灰釉陶器 碗	口径(15.4) 底径(7.2) 器高(2.2)	密	良好	内外面：灰黄色(2.5Y7/2)	内外面回転ナデ、外面部底回転 ケズリ、高台貼付	24		
118	E7	II	灰釉陶器 碗	口径(16.1) 底径(7.6) 器高(4.5)	密	良好	内外面：灰黄色(2.5Y7/2)	内外面回転ナデ、外面部底回転 ケズリ、高台貼付	24		
119	E6	II	灰釉陶器 碗	口径 底径(6.6) 器高(2.7)	密	良好	内外面：灰黄色(2.5Y7/2)	内外面回転ナデ、外面部底回転 ケズリ、高台貼付	24		
120	E6	II	灰釉陶器 盤	口径 底径(6.0) 器高(2.0)	密	良好	内外面：灰白色(2.5Y7/1) 外面：灰黄色(2.5Y7/2)（釉面）	内外面回転ナデ、外面部底回転 ケズリ、高台貼付、内面施釉	24		
121	H5	II	灰釉陶器 瓶頸	口径(9.6) 底径(4.2) 器高(4.2)	密	良好	内外面：灰オリーブ色(5SY/2)（釉面）	内外面回転ナデ、内外面施釉	24	8	
122	G5	II	灰釉陶器 壺	口径 底径(9.4) 器高(15.6)	やや粗	良好	内外面：灰白色(2.5Y7/1) オリーブ灰色(10Y4/2)（釉面）	内外面回転ナデ、外面部回転ケズ リ、高台貼付、外面部施釉	24	7	
123	G3	II	古瓢 壺	口径 底径 器高(2.1)	密	良好	内外面：オリーブ黄色(5SY/3)（釉面）	内外面回転ナデ、内外面施釉	24	8	
124	G3	II	古瓶 壺	口径 底径 器高(3.0)	密	良好	内外面：オリーブ灰(10Y5/2)（釉面）	内外面回転ナデ、外面部雙文（しのぎなし）、内外面施釉	24	8	

表22 石器類観察表

掲載番号	出土位置	層位	製品名	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	擇因番号	因版番号
8 SK126	d	砾石		08.90	6.0	4.0	368.6	砂岩	18	5
51 NR017	b	スクレーパー		5.5	4.7	1.0	22.9	下呂石	20	
52 NR017	2	打製石斧		8.8	5.3	1.0	183.2	緑色凝灰岩	20	
53 NR017	2	磨製石斧		8.8	4.4	1.4	88.8	丸紋岩	20	
93 NR032	1	磨石・敲石類		7.7	8.6	6.3	562.0	丸紋岩	22	
125 F5	I	複形石器		2.7	1.1	0.8	3.7	チャート	25	
126 F5	II	研		2.1	1.3	0.8	1.5	チャート	25	
127 F5	II	石核		4.8	4.1	1.3	25.7	下呂石	25	
128 G5	II	打製石斧		16.6	6.0	2.3	374.9	泥岩	25	
129 E6	II	磨石・敲石類		11.4	8.7	4.1	565.1	砂岩	25	
130 G5	II	刮削器		10.2	18.9	6.7	1810.0	丸紋岩	25	8

第4章 総括

第1節 掘立柱建物について

今回調査した平成27年度発掘区（以下、「ZBII発掘区」という。）では、中世の掘立柱建物2棟（SB1・SB2）を検出した。当遺跡周辺ではこれまで中部縦貫自動車道建設などに伴い、多くの発掘調査が実施されているが、中世に属する掘立柱建物は、野内遺跡D地区（文化財保護センター2007）で7棟検出されているのみである。そこで、ZBII発掘区と野内遺跡D地区の立地や遺構について比較し、SB1・SB2の性格について検討する。

まず、野内遺跡D地区¹⁾について概要を示す。野内遺跡D地区は当遺跡南西側の扇状地の末端に位置し、縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。堅穴建物や掘立柱建物、水田遺構などが検出されているが時期不明なものが多く、時期が明らかになっている遺構は古代に属するものが多い。この中で中世（12世紀～13世紀）に属する掘立柱建物は7棟あり、このうちSH2～SH7は四面庇を伴う特徴がある。建物の主軸はSH1～SH3・SH5など傾斜に対して平行・垂直になるように選択されている。また、SH2・SH5・SH7はそれぞれSH3・SH4・SH6と同位置に建て替えを行っている。その際、建物の位置関係については、建て替え前のSH3・SH6は「建物跡が近接し若干ずれるような配置」²⁾、建て替え後のSH2・SH7は「建物跡が離れ並行するような配置」³⁾とされている（図33）。また、報告書ではこれらの掘立柱建物の性格について、3つの視点から検討されている。1つ目は、「古代から谷水を利用し水田を営んできた区画に近接し、古代から中世の灌溉用水路と考えられる溝に主軸を合わせることから、水を管理する場所として機能していた」⁴⁾ことである。これについては「水を管理するために同時期に3棟の四面庇を持つ建物が建つことの必然性はない」⁵⁾こと、「水場に伴う祭祀遺物も出土していない」⁶⁾ことから立証に乏しいとする。2つ目は、「屋敷地のような居住域」⁷⁾の可能性があるのかについてである。これについても「掘立柱建物跡などの付帯施設がない」⁸⁾こと、「遺物の出土状況からみると、中世の集落遺跡と比較すると極端に遺物が少なく、人の生活を窺わせる資料に乏しい」⁹⁾ことなどから疑問が残るとする。3つ目は、集落のような居住域ではないとするならば、「寺仏堂的な建物」¹⁰⁾の可能性があるのかについてである。これについては「柱穴の直径は小さいものが多く、礎盤もない」¹¹⁾こと、「柱配列が偶数のものが多く、入口中央に柱がくることになり、礼拝にも出入りにも差し障りがある」¹²⁾ことから疑問が残るとする。そして「居住域とは異なる性格の場所と想定できるが、その性格を立証するには資料や類例が乏しく特定はできない」¹³⁾と結論付けている。

今回確認したSB1・SB2は緩傾斜地に立地し、主軸はSH1～SH3・SH5と同じように傾斜に対して平行・垂直になるように設置されている。建物の時期は、SB1・SB2が14世紀後葉以前であり、SH1～SH7と時期が重なる可能性がある。掘立柱建物の構造は、SB1・SB2はともに総柱建物であり、SH2～SH7と構造が異なる。建物の建て替えについては、SB1の長軸方位とSB2の梁行方位が同じであることから、SB1・SB2が同時期の掘立柱建物と想定した場合、SB1・SB2周辺で確認した単独柱穴は1基であり、他の建て替えの建物跡は検出されておらず、SH2～SH7のように同位置に建て替え

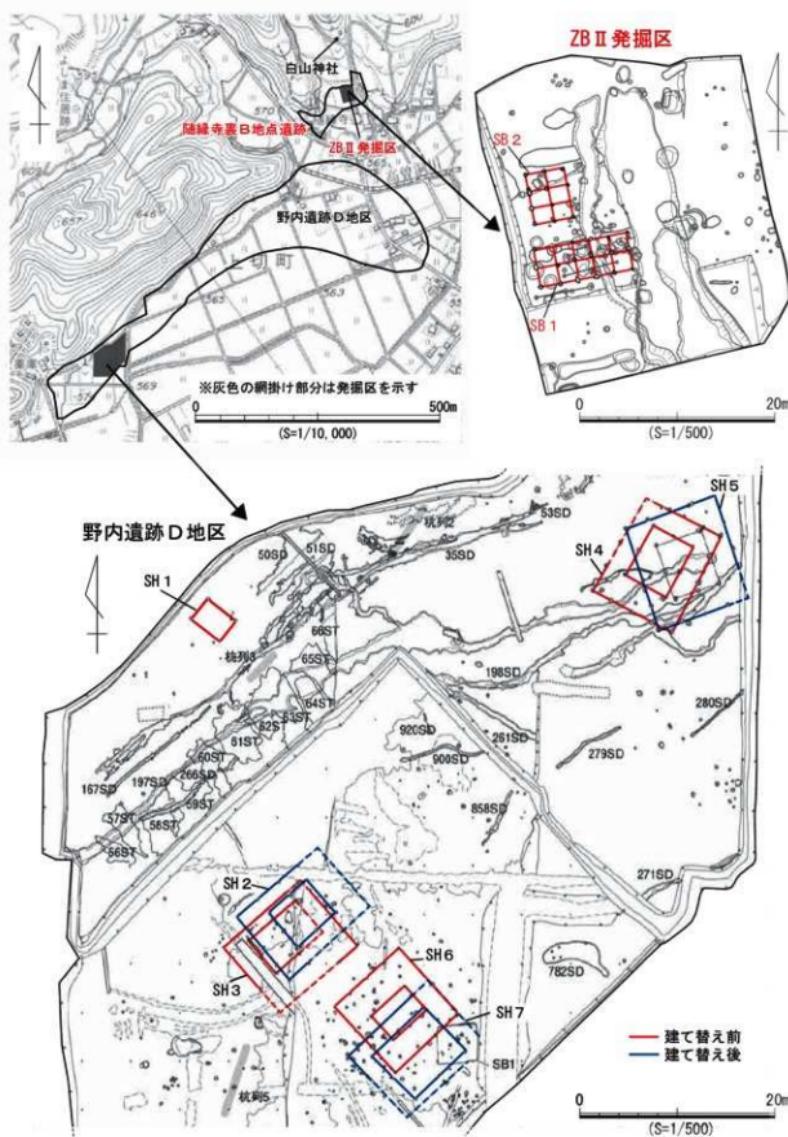


図33 SB 1・SB 2、SH 1～SH 7の配置

を行っている状況とは異なる。建物跡の配置はSB1・SB2の距離は約3mであり、若干ずれる配置についても建て替え前のSH3・SH6と状況が類似する。

統いて、SB1・SB2の性格について、野内遺跡D地区において検討された3つの視点について考える。1つ目の視点にある水の管理場所としての機能については、ZBII発掘区では当該期において灌漑用水路と考えられる溝は検出されておらず、状況が異なる。2つ目の視点にある「屋敷地のような居住域」についても、他の建て替えの建物跡は検出されていないこと、当該期の遺物が極端に少ない¹⁴⁾ことから、野内遺跡D地区と同様に疑問が残る。3つ目の視点にある「寺仏堂的な建物」の可能性については、礎盤がない点は野内遺跡D地区と共通するが、付属柱穴の上端長軸長の平均はSH5を除いてSB1・SB2の方がやや大きい¹⁵⁾。また、柱配列はSB1の桁行は奇数列であり、桁行中央に入口を設けて礼拝、出入りが可能である点はSH2～SH7とは異なる。さらに、野内遺跡D地区周辺では当該期の寺社仏閣は現段階で確認されていないが¹⁶⁾、ZBII発掘区の北側には白山神社が鎮座する（図34）。明治年間の地割によると、図34の破線部で示した道と同位置に里道が確認できる。この里道は白山神社に続く参道となっており、ZBII発掘区はこの参道に近接している。白山神社の創立年代は不詳であるが、『上枝村史』によると「この地は昔、三枝別、または三枝連の本拠であったので、その族人が祖神を奉納した社であるといわれている。その後、鎌倉時代前期、後深草天皇の建長七（1255）年に河上荘が郡上郡長瀧寺白山社々領として再度寄進されて以来、同寺の社僧が年々配札に来て、その勧めにより白山神社を斎祀し、社号を改めたものであろう」とあり¹⁷⁾、白山神社の沿革とSB1・SB2の時期が重なる可能性がある。以上のことから、ZBII発掘区、野内遺跡D地区的それぞれの寺社仏閣との関わりからみれば、3つ目の視点にある寺仏堂的な建物の可能性は検討の余地がありそうである。

ここまで、ZBII発掘区と野内遺跡D地区の立地や遺構について比較、検討をしてみたが、現段階ではSB1・SB2の性格を特定することはできなかった。野内遺跡D地区を除き、飛騨地域において現在確認されているSB1・SB2と同時期の掘立柱建物は、西田遺跡（文化財保護センター1997）、上町遺跡（古川町教育委員会1991、1994）で確認されているのみであり、類例に乏しい。今後、当遺跡周辺の発掘調査や類例の増加をもって再度検討する必要がある。

表23 SB1・SB2、SH1～SH7の比較

遺跡	遺構名	柱間数		付属柱穴の上端長軸長の平均
		桁行	梁行	
当遺跡	SB1	5	2	0.43
	SB2	3	2	0.38
野内遺跡 D地区	SH1	1	1	0.32
	SH2	2	2	0.32
	SH3	2	1	0.31
	SH4	2	2	0.36
	SH5	2	2	0.46
	SH6	2	1	0.25
	SH7	2	2	0.34

表表23では第1を桁行2間、梁行2間の總柱建物としての値を示しているが、桁行2間の柱間があり、中央の柱間のみ若干狭い、という可能性もある。また、梁行2間で桁行2間、梁行2間の別の總柱建物とする可能性もある。

野内遺跡D地区では掘立柱建物を総号SHとしている。
SH2～SH7は西面面だが、表23には身舎部分のみの値を示す。



図34 ZB II発掘区と白山神社の位置

第2節 土地利用の変遷

平成25年度発掘調査（以下、「ZB I 南地区」、「ZB I 北地区」という。）成果¹⁸⁾と今回の発掘調査成果を踏まえ、時期毎の遺構や遺物に見られる特徴から土地利用の変遷を検討し、総括とする。

1 縄文時代

当該期の明確な遺構は検出されていないが、自然流路を検出した。自然流路の出土遺物から、ZB II 発掘区の NR017・NR032 は早期前半以降、ZB I 北地区の NR 1 及び ZB I 南地区の NR 4 は後期以降、ZB I 南地区的 NR 3 は後期後半以降、ZB I 南地区的 NR 2 は晩期以降の自然流路と考えられる。遺物では、時期を特定できたものの中では早期前半の深鉢（94～97）が最も古く、ZB II 発掘区の NR017・NR032 及び遺物包含層から出土した。周辺地域¹⁹⁾で確認された早期の遺構は日焼跡²⁰⁾の煙道付炉穴 2 基、ウバガ平遺跡²¹⁾の炉穴の可能性がある遺構 1 基及び焼跡集積遺構 1 基、三枝城跡²²⁾の焼跡集積遺構 1

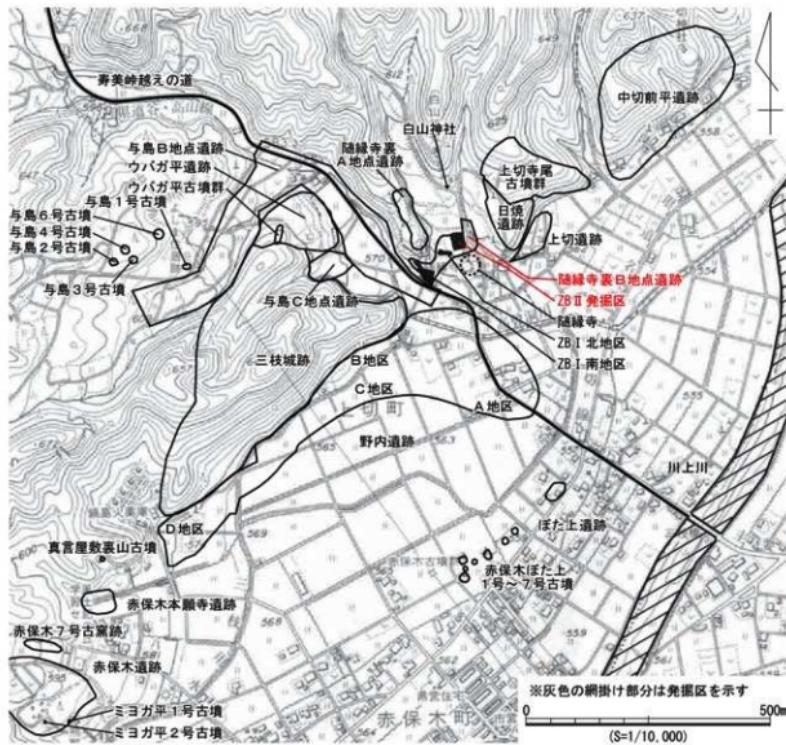


図 35 遺跡の立地²³⁾

基があり、これらの遺構は山麓尾根緩傾斜地に立地する（図35）。当遺跡も同様の立地であることから、ZB II 発掘区周辺は当該期において何らかの活動があった可能性がある。その後は、ZB II 発掘区の NR017 及び遺物包含層から中期の遺物が3点確認されるのみで、限定的な土地利用であったと考えられる。遺物量が増加するのは後期後半であり、これらの約61%が自然流路に伴う遺物である。ZB I 南地区の NR4 の中央及び南東側では、後期後半の縄文土器がまとめて出土しており、遺物の摩滅が少ないことから一括廃棄された可能性がある。なお、NR2 以外の自然流路では古代までの遺物が出土しており、埋没しながらも古代まで存続したと考えられる。周辺地域では後期後半以降の居住域は確認されていないが、三枝城跡、野内遺跡B地区²⁴⁾、野内遺跡C地区²⁵⁾の遺物包含層から後期の土器が出土していることから、当遺跡の周辺には後期以降の居住域があったことが想定され、そこで生活する人々が NR4 における土器の一括廃棄に関わっていた可能性がある。

2 弥生時代

当該期では自然流路以外の明確な遺構は検出されていない。遺物では、時期を特定できたものの中では前期の甕1点が最も古く、ZB I 南地区の NR3 から出土した。周辺地域で確認された前期の遺構は三枝城跡の土坑1基のみであり、当該期の遺物は周辺地域でも出土例が少なく、NR3周辺での限定的な土地利用であったと考えられる。中期になると遺物量が増加し、ZB II 発掘区の SD022、ZB I 南地区の SI2・NR3・SK110などから出土し、前期と比べて土地利用の範囲が広がる。なお、NR3は中期後葉頃に埋没したと考えられる。後期・終末期の遺物は、各1点ずつのみである。後期の遺物は ZB I 南地区の遺物包含層から、終末期の遺物は ZB II 発掘区の SD022 から出土し、前期と同じような限定的な土地利用であったと思われる。高山市史（高山市教育委員会 2016）では周辺地域の遺跡の立地について、中期の遺跡の多くが谷戸に面した丘陵先端部や緩斜面に集落を構える一方で、後期後半以降は冲積地に面した丘陵先端部や緩斜面、自然堤防などの微高地に集落を構えると指摘する²⁶⁾。当遺跡の北西側にあるウバガ平遺跡は谷戸に面した緩斜面に位置し、中期後半の堅穴建物3軒、土坑1基が検出されており、「後期ないし古墳時代初頭に属するとみられるものはほとんどない」²⁷⁾とされている。当遺跡はウバガ平遺跡と同じ谷戸に面した緩斜面にあたり、遺物の主体となる時期の様相もウバガ平遺跡と類似することから、当遺跡周辺にも中期の居住域があった可能性がある。

3 古墳時代初頭～古墳時代後期

当該期では、自然流路以外の明確な遺構は検出されていない。当該期の遺物は ZB II 発掘区の NR017・NR032 からの出土であり、土師器は古墳時代前期頃の高坏（15～18、54～69）・甕（19～26、72～80）・瓶（81）などが最も古い。須恵器は5世紀後葉の坏蓋（27）が最も古く、次いで6世紀初頭、6世紀後葉の須恵器が出土しており、NR017・NR032周辺での断続的な土地利用があったと考えられる。一方、ZB I 北地区の NR1、ZB I 南地区の NR2・NR4 からは当該期の遺物は出土していない。周辺地域では、中期に野内遺跡A地区²⁸⁾で大規模な集落が形成され、5世紀前半の須恵器が確認されている。また、報告書では「当時にあっては須恵器は一般庶民のための実用品というより特別な階層のための貴重品の域にとどまっていたと判断される」²⁹⁾とした上で、遺跡の性格について「須恵器を持つことのできた富裕層の集落域と捉えることができる」³⁰⁾と結論付けている。周辺地域では、野内遺跡D地区で5世紀代の須恵器が確認されており、これらも含めて野内遺跡A地区で確認された飛驒地域への須恵器導入以降、5世紀代の須恵器が持ち込まれていたことを示す重要な資料と思われる。

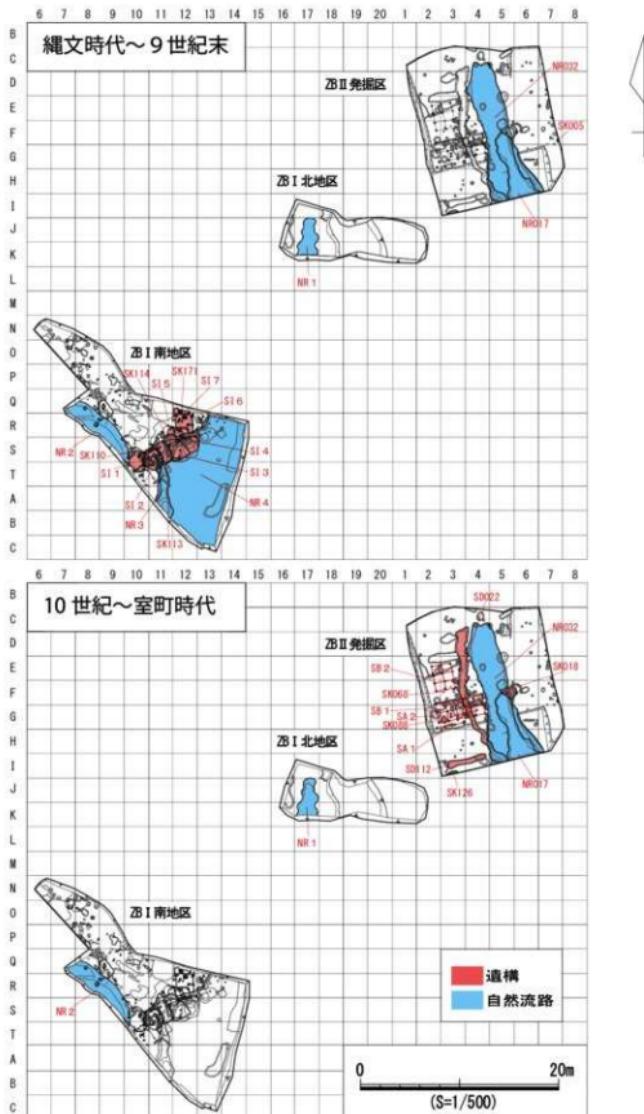


図 36 陸縁寺裏B地点遺跡主要遺構配置図

4 古墳時代終末期～9世紀末

当該期の遺構として竪穴建物7軒、土坑4基を検出した。古墳時代終末期～奈良時代前半には、ZB I南地区でSI1～SI7が造営される。なお、SI3・SI4はNR4埋土上で検出していることから、SI3・SI4周辺のNR4は埋没していたと考えられるが、建物と同時期の遺物が出土していることから(ZB I北地区のNR1の1層、ZB I南地区のNR2の2層、3層・NR4の1層)、周辺の自然流路の一部は崖地として存在していたと考えられる。SI1～SI7の上端規模の長軸長は3.20m～5.02mを測り、主軸は地形の傾斜に沿って北からやや西に振るものが多く、北東から南西へ向かって建物が新しくなる傾向がある。SI1～SI7の重複から、同時に存在した竪穴建物は少ないと考える。周辺地域では、日焼遺跡で同時期の竪穴建物35軒を検出しており、谷筋を挟んで東西に位置する当遺跡と日焼遺跡において、掘立柱建物と竪穴建物が併存する時期がある。日焼遺跡の報告書では、竪穴建物の時期を7世紀後葉と8世紀前葉に区分した場合、各時期ごとに大型の竪穴建物³¹⁾が1軒ずつ建てられ、その周辺にそれぞれ小さい竪穴建物³²⁾が建てられていたことを指摘している³³⁾。当遺跡と日焼遺跡の竪穴建物を比較しても、当遺跡では日焼遺跡のような大型の竪穴建物は検出されていないことから、SI1～SI7は日焼遺跡の竪穴建物群と比較すると小規模な居住域であったと捉えることができる。なお、ZB II発掘区のNR017・NR032からは古墳時代終末期～9世紀末までと、より時期幅の広い須恵器が出土した。摩滅が少ない遺物が大半を占めることから、ZB II発掘区ではZB I南地区の居住域が廃絶して以降も遺物の廃棄場所として利用されていた可能性が考えられる。

5 10世紀～平安時代後期

当該期の遺構として、柱穴列2列及び土坑1基を確認した。ZB II発掘区では、11世紀以降に柱穴列SA1・SA2が設置されるが、何を区画していたかについては定かではない。また、SA1・SA2の所属時期について11世紀以降と報告したが、人工層位、層から出土した灰釉陶器1点のみで時期決定を行ったものであり明確ではない。むしろ、SA1は中世の掘立柱建物であるSB1と主軸方位が同じであることから、SB1と関連のある柱穴列の可能性も考えられる。周辺地域でも10世紀後半には野内遺跡B地区、日焼遺跡での村落及び宗教施設とされる礎石建物の衰退が顕著で、周辺地域における11世紀以降の遺構・遺物の資料は乏しい。今後の調査により当該期の様相が明らかになることが期待される。なお、ZB I北地区のNR1、ZB I南地区的NR2、ZB II発掘区のNR017・NR032からは灰釉陶器の瓶類(92)などが出土していることから、これらの自然流路の最終埋没期は平安時代後期と考えられる。

6 鎌倉時代、室町時代

当該期の遺構として、ZB II発掘区で掘立柱建物2棟、土坑4基、溝2条を検出した。SB1・SB2は第1節でも示したように、同時期に存続した可能性がある。また、SB1・SB2周辺に位置するSK068・SK088、東側に位置するSK018からは龍泉窯系の青磁碗(5～7)が、SB1の南側に位置するSD112からは古瀬戸後I期の卸皿(13)や擂鉢型小鉢(14)が出土した。これらの遺構はZB II発掘区西側に集中し、SB1・SB2・SD112は主軸が揃う。14世紀後葉頃にはSB1と直交するようにSD022が位置することから、当該期以前にはSB1は廃絶したと考えられる。なお、SB1の南側からSD112に至るまでの範囲は削平の影響によって遺構が消失した可能性がある。周辺地域においても、古代以前の遺物の出土割合と比較すると中世に属する遺物の出土割合は極端に少なく、当該期の資料に乏しい。今後の調査事例の増加による資料の蓄積をもって当該期の様相を再度検討する必要がある。

注

- 1) 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『野内遺跡D地区』(岐阜県文化財保護センター調査報告書 108集)
- 2) 前掲1)、114頁。建物跡の距離は約3mを測る。
- 3) 前掲1)、114頁。建物跡の距離は約10mを測る。
- 4~13) 前掲2)
- 14) 当遺跡で出土した中世遺物は、土器類全体の約1.5%（第3章第2節）であるのに対し、野内遺跡D地区で出土した中世に属する遺物は、土器類全体の約2.6%であり、総じて少ない傾向にある。なお、野内遺跡D地区の土器類全体に占める中世に属する遺物の割合は前掲1)の第4表を基に算出した。
- 15) 表23の付属柱穴の上端平均に着目すると、長軸長はSB1が0.43m、SB2が0.38mである。SH5の0.46mを除きSH1～SH4・SH6・SH7より大きい値を示す。
- 16) ZBII発掘区の南側には隨縁寺が位置するが、高山市史（高山市 1953）によると「開基了善は明應六（1497）年八月二十日本願寺実如法王より本尊を下附せらる」とあり、SB1・SB2の存続時期とは一致しない。
- 17) 上枝村史編纂委員会 2000『上枝村史』、650頁
- 18) 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2015『隨縁寺裏B地点遺跡』(岐阜県文化財保護センター調査報告書 134集)
- 19) ここでいう「周辺地域」は、川上川左岸に位置する図35で示した遺跡を含む範囲を指す。図35は20)に掲載した図386に加筆して作成した。
- 20) 岐阜県文化財保護センター2011『上切寺尾古墳群 日続遺跡』(岐阜県文化財保護センター調査報告書 154集)
- 21) 岐阜県文化財保護センター2010『ウバガ平遺跡 ウバガ平古墳群』(岐阜県文化財保護センター調査報告書 112集)
- 22) 岐阜県文化財保護センター2011『三枝城跡』(岐阜県文化財保護センター調査報告書 116集)
- 23) 前掲19)
- 24) 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2009『野内遺跡B地区』(岐阜県文化財保護センター調査報告書 111集)
- 25) 岐阜県文化財保護センター2012『野内遺跡C地区』(岐阜県文化財保護センター調査報告書 122集)
- 26) 高山市教育委員会 2016『高山市史 先史時代から古代編（下）』、高山市教育委員会
- 27) 前掲21)、112頁
- 28) 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『野内遺跡A地区』(岐阜県文化財保護センター調査報告書 102集)
- 29) 前掲27)、137・138頁
- 30) 前掲27)、138頁
- 31) 前掲20)では便宜上、堅穴建物の上端規模の長軸長が7.92m～9.60mの堅穴建物を大型の堅穴建物、2.70m～5.96mの堅穴建物を小さい堅穴建物と表している。
- 32) 前掲31)
- 33) 前掲20)、178頁

引用・参考文献

- 愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史』別編 黒業2 中世・近世 濱戸系
- 愛知県史編さん委員会 2010『愛知県史』資料編 考古4 飛鳥～平安
- 愛知県史編さん委員会 2015『愛知県史』別編 黒業1 古代 猿投系
- 赤塚次郎 2002『考古資料大観2 弥生・古墳時代 土器II』、小学館
- 赤塚次郎 2005「第1章第3節 時期区分」『愛知県史 資料編3 考古3 古墳』、愛知県
- 小野正敏 2001『図解・日本の中世遺跡』、財団法人東京大学出版会
- 小林達雄 1994『縄文土器大観 1 草創期 早期 前期』、小学館
- 岐阜県文化財保護センター2010『ウバガ平遺跡 ウバガ平古墳群』(岐阜県文化財保護センター調査報告書112集)
- 岐阜県文化財保護センター2012『野内遺跡C地区』(岐阜県文化財保護センター調査報告書122集)
- 岐阜県文化財保護センター2015『随縁寺裏B地点遺跡』(岐阜県文化財保護センター調査報告書134集)
- 岐阜県文化財保護センター2021『上切寺尾古墳群 日焼遺跡』(岐阜県文化財保護センター調査報告書154集)
- 財団法人岐阜県文化財保護センター1997『西田遺跡』(岐阜県文化財保護センター調査報告書29集)
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『野内遺跡A地区』(岐阜県文化財保護センター調査報告書102集)
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『野内遺跡D地区』(岐阜県文化財保護センター調査報告書108集)
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2009『野内遺跡B地区』(岐阜県文化財保護センター調査報告書111集)
- 城ヶ谷和弘 2010「第1章第3節 編年及び編年表 土師器・須恵器・施釉陶器（綠釉・灰釉）」『愛知県史 資料編4 考古飛鳥～平安』、愛知県
- 高山市 1953『高山市史 下巻』
- 高山市教育委員会 1971『冬頭大塚古墳発掘調査報告書』
- 高山市教育委員会 1975『飛騨国分寺瓦窯発掘調査報告書』
- 高山市教育委員会 1990『飛騨国分尼寺発掘調査報告書』
- 高山市教育委員会 1993『前平山稜遺跡 赤保木遺跡発掘調査報告書』
- 高山市教育委員会 1995「1 赤保木5号古墳」『高山市内遺跡発掘調査報告書』
- 高山市教育委員会 1998『中切上野遺跡発掘調査報告書』
- 高山市教育委員会 2001「4 飛騨国分寺跡」『高山市内遺跡発掘調査報告書』
- 高山市教育委員会 2005「4 赤保木8号古窯跡」『高山市内遺跡発掘調査報告書』
- 高山市教育委員会 2005「10 平野遺跡・平野1号古窯跡」『高山市内遺跡発掘調査報告書』
- 高山市教育委員会 2016『高山市史 先史時代から古代編（下）』、高山市教育委員会
- 第9回東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会 2002『東海の中世集落を考える－考古学から中世の

ムラをどう読み解くかー』

- 太宰府市教育委員会 2000『太宰府市の文化財 第49集 太宰府条坊跡 XV-陶磁器分類編-』
- 高橋浩二 2000「古墳出現期における越中の土器様相-弥生時代後期から古墳時代前期前半土器の編年位置付け」『庄内式土器研究』XXII、庄内式土器研究会
- 田中啄・佐原真 2003『日本考古学辞典』、株式会社三省堂
- 中尾七重 2012「古渡路遺跡の中世掘立柱建物について：架構等の復元とその特徴」『文化学園大学紀要、服装学・造形学研究』、文化学園大学
- 兵頭勲 2008「押型文土器」『総覧 縄文土器』、株式会社アム・プロモーション
- 上枝村史編纂委員会 2000『上枝村史』
- 宮本長二郎 1999「日本中世住居の形成と発展」『建築史の空間-関口欣也先生退官記念論文集』、中央公論美術出版
- 渡邊博人 1984『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』、各務原市教育委員会
- 渡邊博人 1996「美濃の後期古墳出土須恵器の様相-蓋坏の型式設定とその編年試案-」『美濃の考古学』創刊号、「美濃の考古学」刊行会
- 渡邊博人 2008「美濃須衛窯について」『2008年度愛知県大会研究発表資料集』、日本考古学協会 2008年度愛知県大会実行委員会

図版1 発掘区遠景



発掘区遠景（北東から）

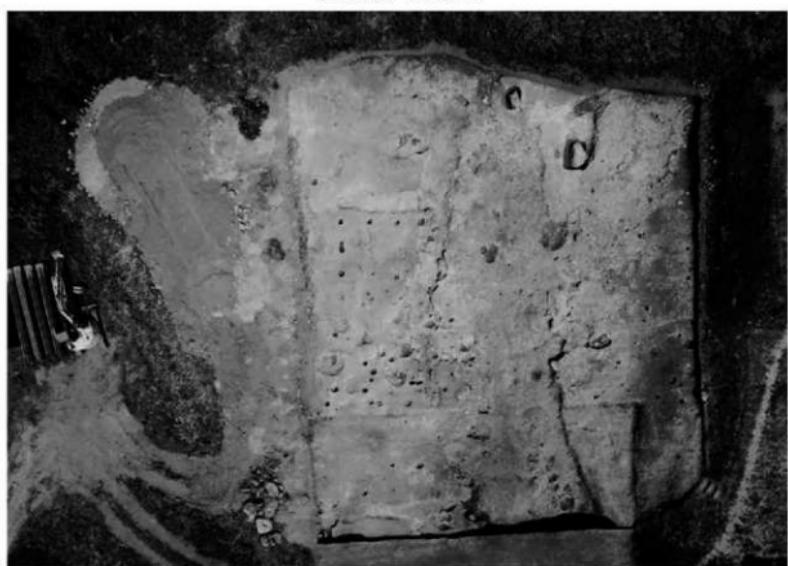


発掘区遠景（南西から）

図版2 発掘区全景

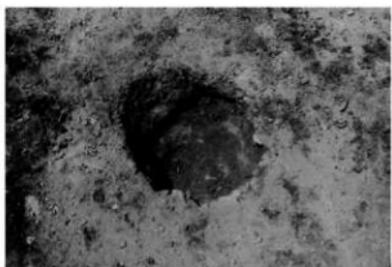


発掘区全景（北西から）

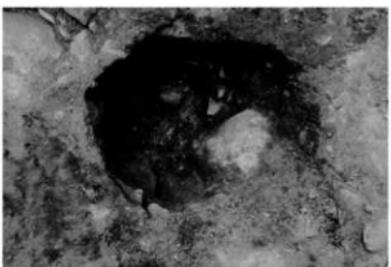


発掘区全景（北が上）

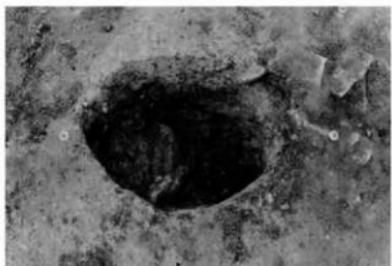
図版3 挖立柱建物



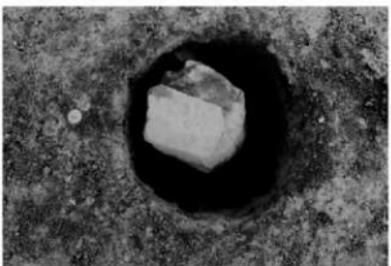
SB 1-SP020 完掘状況（南から）



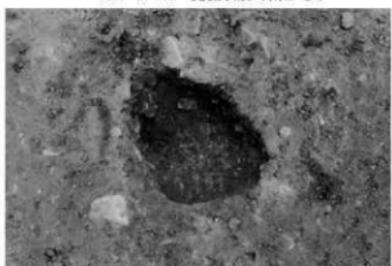
SB 1-SP058 完掘状況（北西から）



SB 1-SP142 完掘状況（南から）



SB 1-SP157 碑出土状況（南から）



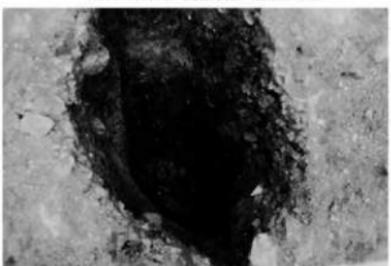
SB 2-SP139 完掘状況（南西から）



SB 2-SP160 完掘状況（南から）



SB 2-SP161 完掘状況（南から）

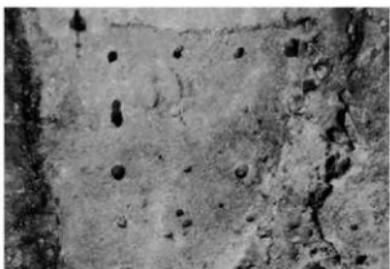


SB 2-SP163 完掘状況（南から）

図版4 据立柱建物、溝、自然流路



SB 1 完掘状況（北が上）



SB 2 完掘状況（北が上）



SD022 土層断面（南から）



SD022 北半部 完掘状況（南から）



SD022 完掘状況（南から）



NR032 完掘状況（北から）

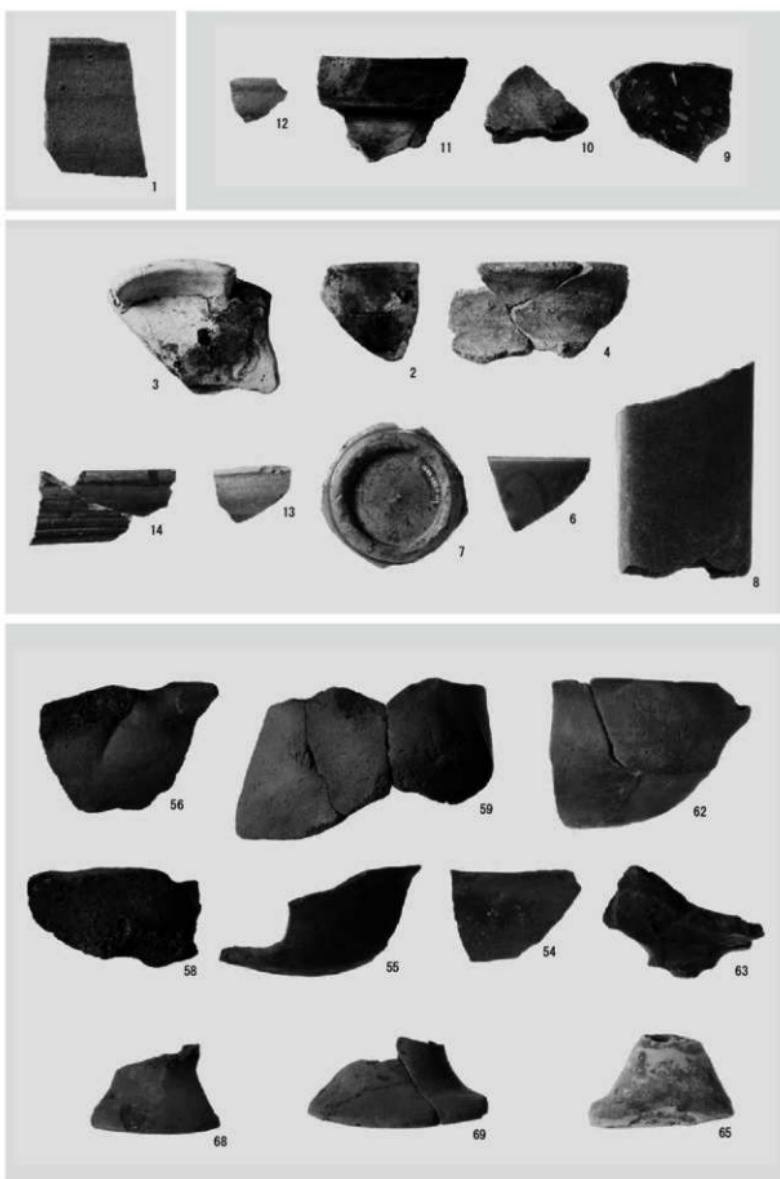


NR017 土層断面（南から）



NR017 完掘状況（南から）

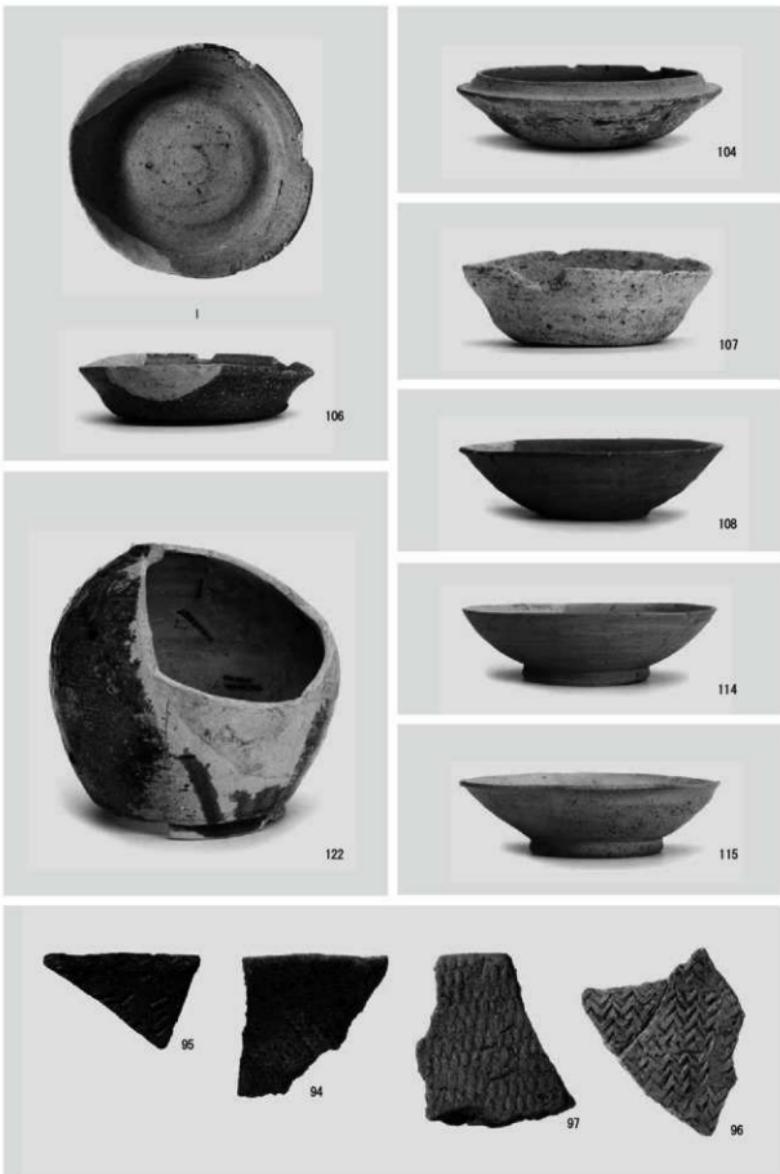
圖版 5 出土遺物 1



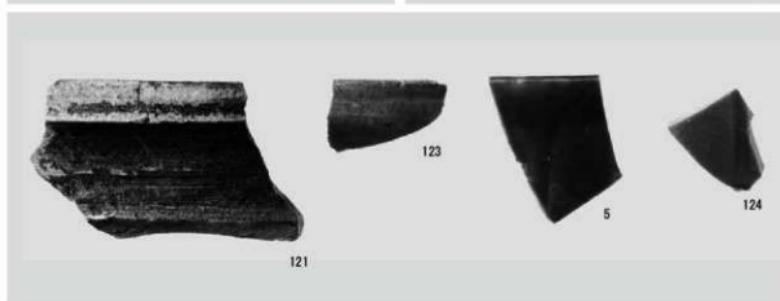
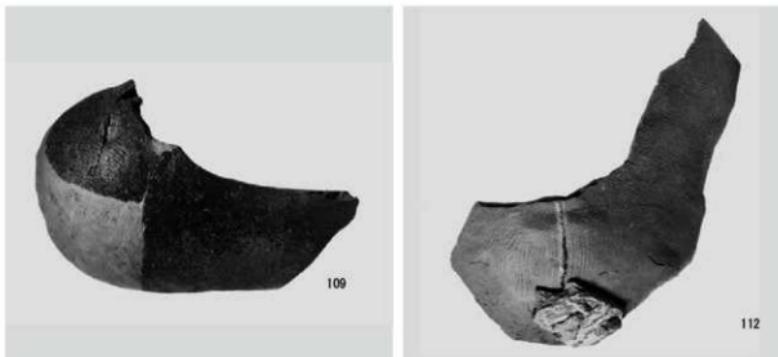
图版6 出土遗物2



圖版 7 出土遺物 3



图版8 出土遗物 4



報 告 書 抄 錄

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第155集

随縁寺裏B地点遺跡II

2022年3月4日

編集・発行 岐阜県文化財保護センター

岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 株式会社もとすいんさつ